



道

求



第參號

第參卷

(行發日一回一月每)行發日一月四年九卅治明

可認物俱郵種三第 日六廿月二十年一卅治

求道第叁卷第叁號目次

求道

◎人生の歸趣

感謝

◎春光和融

感謝

◎人生と往還廻向 ◎生死問題と人生問題 ◎光明の人生 ◎人生問題と信仰問題 ◎一念の信◎和讃

講話

◎懺悔と感謝

聖傳

◎ジャータカ釋尊傳——出家

告白

◎攝取

講義

◎歎異鈔——嘆異鈔の著者

嘆咏

◎蕾の玉(連作短歌)

左千夫

◎空(長詩)

行泉

◎水の響(連作短歌)

甲之、八風

時報

◎展墓行

◎長濱佛教青年會 ◎三河榎前村尙武會 ◎静岡演說會 ◎沼津演說會

每日曜午前九時

求道學舍 (本郷森川町一番地)

每土曜午後二時

第一 求道會 (九段坂佛教俱樂部)

每月二日午後六時

第三 求道會 (日本橋蠟燭町説教所)

求道

第叁卷 第叁號

人生の歸趣

人生の歸趣は佛天の御はからひ也、是れ昨年六月吾人が續仰讚嘆したる題目でありました、情、人生の歸趣を察するに結局吾人思議の境を絶して、遂に言語文字の及ぶ所にあらず、意極まり、言盡き、想像の外に出て、意識の及ばざるの所、而して、何もかも、佛天の御はからひ也との確信は益々動かすべからざる所である。

吾人は自分では、よく人生を理解したつもりである、されど實際は中々分からぬものである、釋尊は生老病死の問題を解決するために出家せられ、此問題の解決を圓滿に全うせられたのが成道である、而して生老病死といふは畢竟人生問題の極である、其他百般の人生問題は皆此生老病死の間に含まれてある、其人生の歸結を明了に覺られたが佛陀である、

そして其生老病死の根源は無明にあることを悟了して之を滅されたる經驗の結果が十二因縁である、故に若し理想的に言

ふならば吾人は釋尊の如くあつて、人生を理解したと言ふべく、無明を滅したと言ふべく、佛陀となつたと言ふべきものである。

されど吾人は此人生の歸趣を知るべく煩悶道を求むるものなれば、一たび信仰に入りたる時は亦吾人の微かなるものすらも人生の歸趣を知り得るのである、されば果して釋尊の如く三明六通を具へて無碍自在なるかと言へば是は、吾人は肉身を具へ、此上に生存する限りは不可能の事である、然らば吾人は信仰によりて如何に人生の歸趣を知つたかと言ふに唯此人生の歸趣を悟了したまへる佛陀の在すことを認むることによつて吾人も亦人生を達観することが出来た、猶適切に言へば歴史上の釋尊が爾のみならず、三世十方に通じて常に吾人生死病海に流轉せるものを悲憫したまへる、盡十方無礙光如來は必ず吾人如來の愛子を然るべく導きたまふとを確信することによりて、人生の歸趣は明らかである、人生の歸趣は吾人のはからふべきことであらざる事が明らかになつたとき、佛天の御はからひなることは明了になる。

故に吾人が信仰の内面に立ちて此事を味ふに、一たび信仰に入りて光明に接したるときは人生の凡てが明らかになつた

やうな心持がする、されど實際上人生の出来事を熟考するに  
 信後と雖、随分不可解を絶叫することがないでもない、従て  
 愚痴をこぼすこともある、豫想に反することもある、自己を疑  
 ひ他人を疑ふこともある、されど一旦佛を認めたる已上は萬  
 事此佛の知ろしめす所である、佛天の計らひたまふ所である  
 と云ふ確信は動かすことの出来ぬものである、此一確信の星  
 の光は幾千萬の無明の雲霧を自から照破する力がある、故に  
 信仰とは佛陀を確信することである、信仰生活といふは人生  
 の凡てを其確信したる佛陀に任せて生活することである。

其信仰生活の味より人生の歸趣を見るときは實に不可思議  
 の極である、自己自身が經來りたる行程を顧み、又他人の行  
 きつゝある経過を察し、人生の出来事、仔細に見來れば皆、各  
 自が考へつゝあるよりも、より大なる意味を以て、より大なる  
 目的に向て進みつゝあることが明らかである、即ち此佛陀  
 を認めざるの人は此佛陀を認むべく、佛陀を認めたるの人は  
 其佛陀の力の奥深きことを経験すべく、各自此佛陀に對して  
 みれば如何に自己の小なるか、罪あるか、不完全なるかを自  
 覺すべく進みつゝある経過たることは、毫も疑ふことは出来  
 ぬ、かくの如く信じつゝも、吾人は兎角、自己を中心として

は念佛のまこと也。

吾人は唯佛を仰ぐことによりてのみ信界の統一を保ち、人  
 生は佛陀を中心として其光を發揚するの舞臺である、嗚呼。

○人生の歸趣は佛天の御はからひ也(其一)

佛智不思議なること如何にして、人間の力を以て思議すべきに非  
 る也、吾人常に佛智不思議を信じ、日夜之を口にし、朝夕之を讀み、而  
 して猶此不可思議の境界に向て思議を挟むことありき、而して吾人自ら  
 思議を挟みたることを自覺せずして私に自ら沈思黙想す、以爲らく、  
 人生如何にせば可ならむと、是既に思議するものに非ずや。世人以爲ら  
 く、如何にして生活せむ、如何にして療養せむ、如何にして學問せむ、  
 如何にして修養せむ、如何にして宗教界を刷新せむ、如何にして信仰を  
 確立せむ、如何にして傳道せむ、如何にして世の佛智を知らざるものを  
 して知らしめむと、皆是人間の思慮を以て不思議の佛智を思議し、佛智  
 を信ぜざるが爲めに徒らに計畫云爲するもの、たとひ其情切にして其志  
 多とすべきが如しと雖其根底たる畢竟佛智懸遠するより出て來らざるは  
 なし、佛天は決して吾人に對して其天眼を意り王ふが如き無慈悲なる佛  
 陀なければ也。

人生を測量したるがる習慣がある、即、自己を尺度として善惡  
 邪正是非得失を判断せんとする情は止まぬものである。此時  
 唯仰ぐべきは佛陀である、信すべきは佛天である、必ずや遂に  
 佛天の御はからひたる事が明らかに分かるやうになる、故  
 に人生の歸趣は佛天の御はからひ也とは決して絶望の叫びな  
 くて、鑽仰仰嘆の極である。

『まことに如來の御恩といふことをば沙汰なくして、我も人  
 も善し惡しといふことをのみ申しあへり、そのゆゑは如來の  
 御心によしと思召す程に知り通したらばこそよきを知りたる  
 にてもあらめ如來のあしと思召す程に知り通したらばこそ惡  
 しきを知りたるにてもあらめと煩惱具足の凡夫、火宅無常の  
 世界はよろづのこと、そらごと、たはごと、まことあること  
 なきに、唯念佛のみぞまことにてをばしますところ仰せは候  
 ひしか、』

洵に千古の金言也、善し惡しは如來の御存知也、人間の立  
 場。に立ちて人生を論ずること皆一場の戲言也空言也、吾人佛  
 の如くありてこそ、善し惡しの沙汰をもすべけれ、煩惱具足  
 の身を以て、火宅無常の世界に居す、何を是非邪正を口にす  
 るの資格あるべき、唯沙汰すべきは如來の御恩也、仰ぐべき

春光和融

人生未だ佛陀の慈光を見出さぬときは三冬嚴寒の氷雪の凍  
 りつめた如きものである、社會全体の組織、各人相互の關係  
 冷やかにして少しも慈悲の暖かさを見出すことが出来ぬ、而  
 して此間に於ける諸の出来事は最後春光和融の光景を迫り出  
 すべき道行である。

全体人間は自己夫自身では到底立往くことの出来ぬもので  
 ある、社會も佛の光なくては決して和融することの叶はぬも  
 のである、しかるに若し眞實佛陀の光を仰がずして自分で往  
 けるもの、様に考へ、信仰なくして平和なる社會を作り出さ  
 んと考ふるならば必ずや一大蹉跌を來すべき運命を有して居  
 るのである、故に人生に於ける諸の出来事は人生に於て信仰  
 の必要を感ぜしむべく、佛陀の光を仰がしむべく種々に企て  
 られたる計畫である。

吾人は信仰已後今日まで過ぎ來りたる諸の出来事の始終を  
 察するに何れも皆佛陀の光の人々の間に顯はるゝ事實である  
 若し此目的なかりせば實に人生は無意味である、人生の出来  
 事、喜ぶべきもの憂ふべきもの、様々にして、甲は乙と衝突

し、丙は丁と矛盾して人生頗る調和を缺き、統一を破りてある、されど詳かに之を察するに本来人生信仰なかりせば此の如くなるべき運命を有するものであつたのである、而して今まで夫が破烈せなかつたまでのことである、而して此の如く衝突矛盾を來すものは寧ろ其調和統一を持來すべき順序として避くべからざる事である。

人若し信仰の地位に達するときは絶対の調和を見出すことが出来る、社會若し信仰を以て融和するときは圓滿なる歸結に達することが出来る、眞に人生に於ける統一は信仰によりてのみ來たざるゝものである。若し信仰を以て統一されたるときは理想的の平和を持來たさるのである、蓋し人生に信仰なきときは恰も氷雪の凍りつめたるが如く隨て、種々の淺間しき出來事も生ずるのである、恰も氷の上に水を注ぐ如きもて益々氷結を大ならしむるのみである、然るに一たび信仰に入りて佛陀の慈悲を見出すときは今まで凍りつめたる胸中が自から融して、氷結せる罪惡の念は悉く懺悔の涙となりて溶け去るものである、故に人が信仰の力によりて内心が改造さるゝときは更に外部の事情の如何に拘はらずして根本的に融し來ること、恰も春風に遇ひて三冬嚴寒の氷雪が悉く

自力の計ひの無効なる所以である、されど一たび春風吹き來るときは和融の氣到らぬ限なき如く、石をも融かし、岩をも和けんとするが如く、人生何人も、此佛陀の慈光には攝取せられぬものはない、和讃に『慈光はるかにかふらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ』とは此境である、そして此慈光に遇ふと遇はぬとは決して吾人の思慮の及ぶところではない、之を宿善宿縁といふ、『偶々行信を得ば遠く宿縁を慶べ』といふは此春光和融の慈悲に接したる歡喜である。

其、二

人は須らく佛天の覆ふ所極るなきを信すべし。人は須らく佛天の計り玉ふ所、吾人思慮の外に出づること信すべし。人は須らく佛天の到る所、至微至細通せざることを信すべし。人は須らく佛天の力を被るにあらざれば一擧手一投足だもなし能はざるを信すべし。既に稱して不可思議といふ、一言にして盡せりと云ふべし。此境に向ては吾人一指を下す能はず、一言を挟むあたはず、驕尊既に嘆して曰く、我説くこと晝夜一切すと雖尙未だ盡すこと能はずと、吾人の小智豈佛智海に向て測量を企つべけんや。經に曰く如來の智慧海は深廣にして涯底なし、二衆の測る所に非ず、唯佛のみ獨り明らかに了りたまへりと、眞に是唯佛と佛との知見なるもの、徒らに思慮の計算測量を違ふせむとするは、既に是れ佛智を輕視し、佛天に對して不遜なるものと云ふべき也。

融け去る如くである、和讃に『罪障功徳の體となる、氷と水の如くにて、氷多きに水多く、障多きに徳多し』の眞境である。かくの如く佛陀の信仰によりて來たされたる平和は實に永久のものである、而して是は或人へのみ來るものにあらずして苟も人間たる已上は必ず凡てに來るべきものである、故に甲に來りたる慈光は乙にも來り、丙に來りたる信仰は必ず丁にも來るものである、恰も春の季候が來るならば如何なる山奥も都會中央の公園も六十餘州到る處櫻花爛熳、一様の春が來るが如きものである、人生亦此の如きものにして一たび佛陀の光明に照さるゝときは如何なる罪惡も闇黒も善人も惡人も智者も愚者も皆同様の攝取にあづかるものである、此に至りて眞箇に春光和融の理想的社會が來るのである。

此の如き社會は常に作ることが出来るかといふに決して容易なるものではない、寧ろ三冬嚴寒の季候を経なければ春が來らぬ如く、先づ人世の冷寒を経験した後でなければ中々平和の社會は來らぬものである、そして必ず其時節の來ることは確かなれど其時の來るまでは容易のことではない、寧ろ人力を以て之を來たさんとするも不可能である、三冬嚴寒の中、如何に春を來たさんとするも徒勞であると同様である、即是

感謝

人生と往還回向

彌陀の廻向成就して 往相還相ふたつなり  
これらの廻向によりてこそ 心行ともにえしむなれ。  
往相の廻向ととくことは 彌陀の方便ときいたり  
悲願の信行にしむれば 生死すなはち涅槃なり。  
還相の廻向ととくことは 利他教化の果をえしめ  
すなはち諸有に廻入して 普賢の徳を修するなり。  
三年前我が父の示寂によりて眞實證の靈境を示したまひき、今や我子の天折によりて蘭林遊戯の化縁に遇ふ、而して共に父の病床に哭したる從弟は骨を北韓の邊境に埋めて杳として歸らず、嗚呼人生は洵に往相還相の出入交叉の衢なる哉吾人も亦此回向によりて信樂開發の時に遇ひ、常行大悲の徳を賜ふ、嗚呼人生如來の回向なかりせば生死海の流轉あるのみ、苦惱海の沈淪あるのみ  
生死の苦海ほとりなし ひさしくしづめるわれらをば

彌陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける。  
 往相還相の回向に まふあはぬ身となりせば  
 流轉輪廻もきはもなし 苦海の沈淪いかせん。  
 彌陀觀音大勢至 大願のふねに乗じてそ  
 生死のうみにうかみつゝ 有情をよばふてのせたまふ。  
 大願海のうちに 智恵のなみころなかりけれ  
 弘誓のふねにのりぬれば 大悲のかぜにまかせたり。

生死問題と人生問題

生と死とは人生の極所なり、既に如來の回向によりて生死の沈淪を免る、況んや生を以て始まり死を以て終る人生五十年何れの時か大悲の光明にあらざるべき、人動もすれば生死問題のすなはち人生問題なることを知らず、佛教の無常觀を見て罪惡觀あるを知らず、厭離穢土の一面を見て光明攝護の人生あることを悟らず、痛ましき哉、親鸞聖人讀して曰く、  
 超世の悲願さきしより、 われらは生死の凡夫かは  
 有漏の穢身はかはらねど こころは淨土にすみあろふ。  
 煩惱にまなこさへられて 攝取の光明みざれども  
 大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり。

光明の人生

人の宗教を語る、思想觀念に止ること多し、故に光明の人生を語る、單に人世に對する善美なる觀察と見做すもの多し、宗教の豈主觀的思想にのみ満足し得るものならんや、實に光明の人生は眞實佛の吾人に與へたまふ事實也、事實を離れて宗教を語る、物を食はすして味を想像するが如けむのみ、光明の人生は主觀的觀念にあらず、詩人的色彩にあらず、實に是吾人人事の事實也、具體的の境遇也、人生何れの處か如來の慈悲の溢れざる所がある、之を憶ひ之を念はく敬虔感謝に堪へざる者、一たび信仰の門を開かば、是即ち宗教の力也、信仰の實現也、曰く

佛智不思議の誓願の 聖德皇のめぐみにて  
 正定聚に歸入して 補處の彌勒のごとくなり。  
 大悲救世聖德皇 ちのごとくにあはします  
 大悲救世觀世音 はのごとくにあはします。  
 久遠劫よりこの世まで あはれみましますしには  
 佛智不思議につけしめて 善惡淨穢もなかりけり。  
 聖德皇のおあはれみに 護持養育たえずして  
 如來二種の回向に すゝめいれしめあはします。

聖人が磯長廟下の靈告によりて痛切なる無常觀と深刻なる罪惡觀とを惹起し、六角堂裏の夢想によりて求道の満足と信仰的家庭とを實現し給ふ、是豈嚴父慈母の護持養育にあらずや、眞個に光明人生の事實也。

人生問題と信仰問題

光明の人生とは單に人生に對する觀察に非ずとせば、人生問題の解決は單に人生は佛の賜也と觀するの謂にあらず、かくの如く觀し來る根底の門戸開けずんば不可也、猶切言せば佛陀夫自身を認めずんば何ぞ佛の賜を感せん、而して吾人此の如き佛の慈愛を認むは實に信仰の問題也、信仰の問題は佛智不思議を信じ奉ること也、一たび佛智の不思議を信じ奉る、生死問題、人生問題皆自から解決し來る、嗚呼一たび慈悲の源泉を認む、人生悉く光明海ならざるなし、煩惱即菩提にして生死即涅槃也、深刻なる罪惡觀の下に慈悲の光明輝き、悲哀なる無常觀の下に永劫の平和來る、嗚呼威德廣大の信なる哉、曰く

無碍光の利益より 威德廣大の信を得て  
 かならず煩惱のこぼりとけすなはち菩提のみづとなる。

罪障功德の體となる こほりとみづのごとくにて  
 こほりおほきにみづおほく さけりおほきに徳おほし。  
 名號不思議の海水は 逆謗の屍體もとどまらず  
 衆惡の萬川歸しぬれば 功德のうしほに一味なり。  
 盡十方無碍光の 大悲大願の海水に  
 煩惱の衆流歸しぬれば 智恵のうしほに一味なる。

一念の信

一念とは信樂開發の時刻の極樂を彰す、正に是れ信仰の關門開けたるの瞬間也、即ち初めて佛智の不思議を見出し、信心の源泉涌出したるの端的也、是偏へに釋尊の指導と彌陀の引接によらずんば吾人罪濁の胸中豈忽然として此の如き清淨の源泉を生せんや、源泉一たび穿たれんか日夜滾々とし絶ゆることなし、是既に佛陀絶對の水層に徹したるに由らずんばあらず、故に如何なる障礙あるも遂に之を止むべからず、稱して金剛の信といふ、たとひ吾人有漏煩惱の穢身之を汚すあるも清淨の信水は自然法爾に心垢を洗除して忽に感謝の月影を宿し、一念信源開きなば念々懺悔相續して永劫絶ゆることなく長へに生死流轉の根底を破壊したまふ、噫大なる

哉一念の信、讚に曰く

釋迦彌陀は慈悲の父母 種種に善巧方便し  
 われらが無上の信心を 發起せしめたまひけり。  
 真心徹到するひとは 金剛心なりければ  
 三品の懺悔するひと、 ひとしと宗師はのたまへり。  
 五濁惡世のわれらこそ 金剛の信心ばかりにて  
 なかく生死をすてはて、 自然の淨土にいたるなれ。  
 金剛堅固の信心の さたまるときをまちえてぞ  
 彌陀の心光攝護して ながく生死をへたてける。

和讚

親鸞聖人が老境圓熟の信心は和讚に於て遺憾なく詠せられぬ、而して聖人が信心を以て人生を経験したまひて、一如來の光明を感謝したまひし芳跡を歴々として拜し奉るを得べし、蓋し致行信證は信念の結晶也、和讚は信念の鎔融也、故に信念の人生上に於ける實現は和讚に於て最も眞髓を示したまへり、而も少しも説破したまはざる處に無限の蘊蓄あるを見る、最も晩年の作なる正像末和讚に於て最も適切に人生に響くもの多きが如し、皆是聖人が如來の慈愛を人生の上に拜し

たまひし結果也、吾人終身之を味ひ奉るも猶盡さざるを覺ふ、宜哉、蓮如上人教行信證の中樞たる正信偈と和讚とを以て勤行讚嘆の軌を設けたまひしこと、吾人垂髫にして之を口にし、白髮にして鑽仰彌々堅く、彌々高からん。

Enter the path! the is no geief like Hate!  
 No pains like passion, no deceit like sense!  
 Enter the path! far hath he gone whose foot  
 Treads down one fond offence.  
 Enter the Path! there spring the healing streams  
 Quenching all thirst! there bloom th' immortal flowers  
 Carpeting all the way with joy! there throug  
 Swiftest and sweetest hours!

講話

懺悔と感謝

(求道學會日曜講話)

近角 常觀

今日は「懺悔と感謝」といふ題を出しました。我々が此の信仰の有様は始終懺悔の心と感謝の心として、此の二つが信仰の至極内面の有様である。て信仰と申せば兼て言ふ如く佛のまこと、佛の慈悲を頂く事であるから、實に難有いに違ひ無い。が兎角信仰を獲たらば、立派な者に成るだらう、非常に人格が高まるだらう。一切の苦みも去るだらう杯と始に於て信仰に就て種々の豫想を持って信仰を求むる順序となつて居る。成程、之は、尤の事て、信仰に入つて仕舞つた結果を見れば如何にも其如く成るのである。併しながら始に於て既に斯の如き豫想を以て行かうとするのは、第一自分を善くする事が信仰であるといふ考から來るのである故、信仰に入るのが甚だ六か敷くなる。信仰と謂ふは決して初より斯く爲ねばならぬ、斯くならねばならぬといふのでは無く、信ずるといふは自分が信ずる氣で信ずる事では無い。佛の偉大なる事を聞けば此方が信ぜずには居られず、廣大の慈悲を聞けば喜ばずには居られぬのが信仰の來る初めてである、佛陀の偉大なる御力を聞いて人々が信ぜずには居られぬやうになるが入信の初めてあ

ります。現今の信仰界で最も注意すべきは實に此の點で、多くの人は自分の心に斯く思へるのが信仰である或は苦悶の取れるのが信仰であると、自分の心の上に豫想して進む爲め、却て信仰に入り難いのであります。信仰とは何うかと言ふに、一言にて云へば佛陀の御恵みに氣が着く事である。佛陀の御恵みは吾々の信前と信後とを問はず、常に變り無くましますので、我々は此の廣大の御恵みに取り捲かれ導かれて、無始の始めより、今日只今迄過ぎ來つたのである。此は正しき事實なのであります。夫をかう思ふのであるとか、かう信ずるのであるとか云ふと、つまり事實は無くてもさう思はねばならぬと謂ふ事になり、信仰はいつ迄経ちても來る事が無いのである。我々が日常の生活に見ても、此の廣大の御恵みに氣が就かぬ故に、色々と人間の考を立場にして、自分の心をば正しと爲し善となし、我が心に叶はざるをば惡なりとして、人間の心で善惡を決めて苦しみつゝあるのである。處が一朝氣が就いて見ると、此の氣の着く事が既に佛縁で、其の佛縁には種々様々あるが、兎に角今迄は佛は無きものとして道理理屈で過して居るのであるが、實は始めより大なる御恵みを蒙つて居たのである。若し人生始めより確かなものならば、佛陀無くとも立派に行かざるべき筈である。處が人生は相對界で、健康上、交際上或は財産上、生活上等諸方面よりして衝突が事實に現はれて來る。而して人生の頼み少き事が彌々知られて來る時に、尙ほ人生の立場に居るならば、如何に苦しくても自分の力を以て切り抜けて行くより外に仕方が無い。我々が單に人生丈の立

場に居る時は凡てが斯の如くて、若し又自分に都合の善い事があれば都合の善いて矢張り自分の運の善き故と思ひ、善に就け悪に就け、自分の力でやらうと爲て居つたのである。併しながら氣が着いて見ると、人生は人の力で行けるもので無い今迄自分の力だと思つて居たのが、計らんや廣大の御恵みがましましたものである。此の佛陀に據らずんば吾人は到底安神は出来ぬ、又此の佛陀の御恵みを見れば安神せずには居られぬのである。今迄は此の偉大なる事實に氣着か無かつたもの故、色々十人十色に考へて苦しんだものであるが、此の御恵みが解かつて見ると、世の中に何一つ不足は無い、此の御恵み一つで最早や充分である。斯の如く佛の御恵みに氣が就いて歡ぶやうになつたのが信仰で、信仰と言つて別に此の外に異つた事は無い。斯くして今迄は人生上重要な部分とも思は無かつた佛陀が、今は人生最重要の者、否な此の佛の御恵の外に人生は無様になるのです。

近頃信仰を以て不健全なもの、如くに言ふ人もあります。之は信仰が不健全なものは無く、却て此の人世が不健全なのである、而も不健全なる人生が信仰を以て解かるやうになるのです。一步を進めて言へば此不健全、姑息なる人生に居て、之に氣が就かぬは彌々姑息の事である。人生に死が無きかと云へば誰でもあると答へる、然らば人は死を悲まぬかと言ふに皆悲んで居るのである。すれば既に解かり切つた問題である。此の解かり切つた問題を強て横の方に片づけて種々彌縫せんと試みて居るのは實に不健全姑息の語です。近頃求道の機運が隆まつて來たのは何であるか、此等死等の問題が段々

に入るのだと思つて居つては、何時迄待ちても信仰の來る管はありませぬ。歎異鈔には

惡業煩惱を斷じつしてのち、本願を信せんのみぞ、願にほこる思もなく善かるべきに、煩惱を斷じなば即ち佛なり。佛の爲めには五劫思惟の願その證なくやましまさん。とある、誠に難有い言葉です。

今諸君は何故に、求められるかといふに、自分が不安不満足に故に信仰を求められるのである。其はどういふ風に成り度いのかと言ふに、佛陀を認め度い煩惱を拂ひ度いのである。處が其の佛陀を認め度い、煩惱を拂ひ度い、人間の考が先きに立ち、自分の力が紛つて來るからいけ無いのです。佛陀の恵みはさうでは無い、我々が求むる迄も無く、亦我々が認める認めぬに係はらず、佛陀は既に久遠の昔より我々を導き我々に同情を爲て居て下さる。此の事實が疑はふとしても疑へ無いのです。故に此の點に來れば、「茲て安心をせよ」とか或は「茲て信仰を得よ」とか杯の道理理屈は少も無い、信仰を此方の思ひ振り、考へ振りの如く思つて居ては非常なる間違であります。今迄は人を見ては人を憂ひ、煩惱につきては煩惱を憂ひ、常に心の休まる暇無く苦しんで居たのであるが、佛陀は斯くの如く、生死海に沈淪し、煩惱海に繫縛せられて居る其の我々を哀れみ悲んで、之を救ふて下さるが佛陀の大慈悲である。之を今迄は知らずに居たのだが、氣就いて見れば何故今迄はあの様に苦しんだか、世間の事に計り心を悩まして居たのであるか。斯うなつて來れば實に不斷煩惱得涅槃て、欲心を持ち居る其儘、煩惱をもち居る其儘で喜ばせ

にやつて來て、人生本來の不足、缺陷に氣が就いて來た現象が、實に求道の原因である。人生より行くと寧ろ之が自然なのであります。斯くて人生の諸方面に於て不完全が見えて來れば、是非に完全の者を見出して來なくてはならぬ、其の完全の者を見出すと言ふが、即ち佛陀を求めたのである。夫て、人生は可かぬ、佛陀を求め度い、佛陀とは如何、佛陀は何處にあるのか、人生を捨て、早く佛陀を求め度いといふ考が實に求道者の切り詰めた心中であります。處が斯の如くに求めて居る間は可けないが彌々最後に至て一念佛陀は難有いと解かつて見ると、佛は實に絶對の力である。今迄苦しかつた人生が其の儘忽ち佛の廣大なる慈悲の有様に一轉して來るので

然らば佛の廣大なる御恵みは如何にして得る事が出来るか如何にして信仰は得らるゝかと言ふに、茲に於て佛陀を眺めねばならぬのです。先日講話にも申しましたが、或方が自分の人格の不完全を歎いて、とても安座する事が出来ぬ、遂に報恩講一週間の間一日も欠かさずに自分の寺に參詣して非常の勞にて法を求められた。併し最後に到ても何うしても安心が出来無い、終に耐え兼ねて他の人々に對し、「私は何うしても信仰を得る事が出来ぬ、安心を得る事が出来ませぬ」と告げられた。すると一方の人が「お前が始終拜讀して居る正信偈には不斷煩惱涅槃得樂とあるては無いか」と、言はれた其一言を聞くなり「ア、成程煩惱ある人間を捨て給はぬ佛陀であつた」と氣が就く時直ちに無上の喜びに打たれて大安心の境に入られた。實に茲の處です、我々は煩惱を取りてから信仰

て貰ふ事が出来るのです。て信仰は決して煩悶を取つてから喜ぶのでは無い、煩悶ありながら喜ばして貰ふのである、人生が飽迄不健全故、彌々佛絶對の大慈悲を喜ばせて貰ふのです。猶ほ進みて申せば、世人が道を求めて居る。我々を指して不健全と言ふならば、此は如何にも尤である。我々が不健全である故我々は佛陀を求めたのである、佛陀は此の不健全な我々を恵み愛して下さるのである。此の佛陀の御恵みを何よりも貴く喜ばせて貰ふのが實に信仰の味であります。も、斯う成つて來れば、苦を取るなど言つても自ら心が樂になつて、何事も佛陀に任かせて安神させて貰ふことが出来る。心が安神になつて來れば佛陀を忘れうと思つても忘れる事は出来ぬ、實に是程確かな者は無いやうになる。是れが信仰の喜であります。て信後は唯此の偉大なる御恵みを喜び之を感謝するより外は無い、今迄此を知ら無かつたかと思出しては喜ぶのであります。即ち信仰は佛の恩徳を認めるのである、故に信仰は感謝であります。

處が茲に一つ信仰に入つた方も、亦未だ信仰に入られない諸君も共に大に注意せねばならぬ點がある。夫は何かと言ふに、我々が信仰に入つた時は即ち絶對界の佛陀に逢つたのであるから實に非常の喜びである。處が此の喜があまりに大き過ぎる程と自分が佛陀の大慈悲に出會つた事に氣が就かぬ程に嬉しい。其爲め動もすると佛の御恩といふ點を忘れて仕舞ひ、感謝の思が來らずして自分が佛になり、自分が難有く成つた様の氣になる事がある。是は大に注意せねばならぬ點であります。我々が信仰に入つて喜ぶのは、煩惱が取れたが爲

めに喜ぶのは無い唯、廣大なる佛陀の大慈悲に逢ひ奉つたのが嬉しいのである。故に此の喜びは全く佛陀より頂いたのである。願力無窮にましませば、罪業深重も重もからず、佛智無邊にましませば、散亂放逸も捨てられず。ア、御恩の程が難有いと感謝の念が起つて来て、「如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし、師主智識の恩徳も、骨を碎きても謝すべし」と唯如來の御恩をば喜ばせて貰ふのみであります。

先づ我々が信仰に入つた時初めて起つて来るは感謝の喜びで、而して其半面は實に懺悔の念であります。此は頗る注意を要すべき點で、我々煩悶の取れたには自分の力で取れたのでは無い、又自分の力で心が安らかになつたのでも無い。我れ惡しきが故に佛に慈ぐされ我れ極重惡なるが故に佛の引接を蒙つたのである。してみれば我々が佛陀に對し奉つた時は、自ら慚愧の思ひより外はない。故に御恩を喜ぶ感謝の裏面には常に懺悔の念が沿うて居るのであります。若し自分が信仰に入つたからとて一點でも人間が善くなつたと思つて居たら、實に大なる誤である。全體自個の惡い事を心の底から知つて來たのが信仰である。故に信仰があるから自分がえらい等とは一點と雖も思つてはならぬのである。信仰に入つて人格が高まつた杯とは、夫は横から見て云ふべき言葉で、自分に於ては飽迄も自分の罪の深さをば謝まり奉つるの外は無いのです。

併し夫れならばと言つて、唯自分は極惡深重の仕方が無い者として憂へて悲しんで居るならば、夫は信仰でも何でも無い。自分は斯く罪深き者であるが、斯る者に對して佛陀の惠

問題に就き世間に色々の傾向が起つて來た事である。此は此處に御集りになる諸君に對しては殆ど申す必要も無いのであるが、併し一寸一般の傾向に就て御注意を申して置き度い。兎角信仰に入つた時は、——無論其人々によつて別々ではあるが、——初めて信仰に氣が就いた時、ア、自分が惡かつたと泣けて泣けて動けぬやうの人があるのです。之は懺悔である決して煩悶では無い。煩悶の状態の時に於ても無論自己の罪惡を觀する事は觀するが、其時の觀じ方は、自分が仕方が無い、と言ひながら尙ほ内心自分で以て罪の處置を着ける氣で居るのである。信仰を求めると言つても、實は其處置を着ける爲めの道具手段として信仰を求めて居るのである。然るに茲に一度佛の御惠みに氣が就いて見ると、サテ今迄は何を爲て居つたのであるが、自分の出來もせぬ事を自分でやらう、として居たのは如何にも、あ、がましい、自分で出來る位なら信仰は要らぬ、我が如き淺間しき者あるが爲めに佛陀は御出下されたのであつたか、夫を知らずに今迄苦しんだは如何にも勿體無いと唯懺悔の思のみ先に立ちて來るのであります。

この味に就いては彼の板敷山の辨圓の話が實に味か深いです、親鸞聖人があまりに東國で傳道が激しい故、辨圓自分の教法が段々と流行しなく成つて來た。辨圓の思ふには彼れ親鸞が居る故に自分が斯くの如く困るのであると、即ち茲に殺害の邪見を起して弓箭を持ち出て行つた。聖人が始終通行の板敷山の項に行つて私かに聖人の歸途を持ち伏せして居ると、——こゝが氣の就く時ですな——山の峠で待ち居

みは偏へに重いと、佛陀を仰ぎて又喜の心に轉じて來るのです。其の喜の爲めに、無慚無愧の淺間しき我々が又御惠みて喜ばせて貰ふやうになる。處が其の喜んで居る自分を省みて見ると、口に喜んで居る程實際に喜んで居るか、どうか。信仰に入つた當座は非常の喜び故、如何なる事でも爲し得るかのやうに思つて居る、例へば信仰の爲めならば地獄に落ちても更に悔いぬといふ迄の喜びが出て來るので、其極になり斯くも爲度い、かくも仕て見やうと思つて居るが、實際夫が自分に行へて居るかといふに、少しも出來て居無い。さて自分はえらいと思つて居つたが矢張りもとの人間であつた、と解かつて來る、唯始めと違ふ點は、我は實に如斯き淺間しきものなる故に廣大なる佛陀の御惠みが難有いと再び喜びに轉せさせて貰ひ懺悔と感謝が交々起つて來るやうになるのです。否な起つて來るでは無い、この二つは一物の表と裏との両面である。茲の味が實に親鸞聖人の信仰の極所であります。夫て聖人は自分が佛に成つた杯とは一言も仰せられぬ、さらばと言つて佛と我が全く別であるならば、佛陀は我々の力とは爲つて來ないのであるが、佛陀は我々を哀み我々に同情して下さる偉大なる御力であれば、佛陀は常に我々に付き添うて居て下さるのであります。此の味をば不即不離と言はふか、ア、難有い、ア、勿體無いと懺悔と感謝が交々起り來るのである。此の有様が信仰内面の状態であります。以上は側面より御話し致したのであるが、尙ほ進みて此の味を直接自分の感じの上より申上げて見度いと思ひます。

話を進める前に一つ氣を就けて置き度いのは、近頃信仰の

日には聖人は山の麓を歩通りなされる、山の麓で待ち構へて居れば聖人は山の峠を歩通りなされる、辨圓熟々事の仔細を考へて見るに、之を「御傳鈔」は何はうと「つら／＼」の參差を案ずるに、頗る奇特のちもひあり如何にも不思議だと氣が就いて來た。其處で、一體何ういふ次第か、一寸打明けて様子を聞いて見度いといふ心になつて、「仍て聖人に謁せんと思ふ心つきて、禪室に行つて尋ね申すに、聖人左右無く出て會ひ給ひけり——聖人何の雜作もなく、か／＼と出て會ひなすつた。今迄は殺さうと考へて居た其聖人に彼が逢ひ申したといふは全く佛の御手廻はしとしか考へる事は出來ませぬ。聖人の方でも亦必ず彼を知つて御會ひなすつたに違ひ無いのです。恐らくは聖人の御意では、ア、彼の辨圓が來たのかと、恰も阿闍世王が象に乗つて釋導の前に行つた如く、必ず佛陀の御光に逢いに來たものと信じて、いとこと、無く御出會ひなすつたものでありませう。處が「即ち尊顏に向ひ奉るに、害心忽ちに消滅して、あまつさへ後悔の涙禁じがたし」弓箭を手にして出て來た心が何時の間に異はつたか、いと無く惡心が消えて仕舞つた。「や、暫くなりて有の儘に日比の宿齋を述べと雖も、聖人又驚ける色無し」聖人は少しも驚いた色が無い。聖人の御意では、佛恩を知らぬ者が、さう思ふのも誠に無理は無い、凡夫とある者は誰でも皆其の通りに間違計りして居るのであると少しも驚く事は無いのです。茲に於てか辨圓は「立處に弓箭を切り刀杖を捨て頭巾を取り、柿の衣を改めて佛教に歸しつゝ、終に素懷を遂げき不思議なりし事なり。即ち明法房これなり。聖人之をつけ給ひさ」と、日比の迷心を



改めて佛の恵みを喜びつゝ遂に目出度く往生の本懐を遂げられたのである。此の明法房往生の事は其他にも聖人の末燈鈔、御消息集等にも度々出てある。聖人の時代に於て聖人の御教を取違へ、御子の善戀上人を初めとして彼是れ信心の道を取亂す人達があつた。此の時に聖人はいつても明法房の事を引用して、

明法房などの往生してはしますも、もとは不可思議のひが事をおもひなんとしたる心をもひるがへしなんととしてこそ候ひしか云々(未燈鈔)

とも又

何事よりも明法の御房の往生の本意とげておはしまし候こそ、常陸國うちのこれに志おはします人々の御爲めにめて度きことにて候へ云々(同上)

とも仰せられてあります。

此の明法房が一念廻心して佛恩を喜んだ心持は實に懺悔の思のみである。亦昨年丁度今頃であつた、故黒田最證君が信仰に入られた初めに於ては、唯此の偉大なる大慈悲を今迄知ら無かつたかと泣き悲まれる計りであつた。處が其泣いて居られた心が進んで、二週間に此處へ來られた時は、非常の勞て喜ばれ、自分は例へ如何なる事があつても一身を捧げて傳道すると喜んで居られた。亦丁度同じ頃信仰に入られた無漏田君の方は初めは非常の喜びで、世の中に我程難有い者は無いと傍若無人の歡びであつた。處が黒田君が感謝の方に移られた時分に無漏田君の方は懺悔に轉じ、我れは實に申譯が無いとて切實なる懺悔を爲られました。斯の如く懺悔と感謝

猶ほ一步を進めて直接互の心の上で考へて見度いと思ひます。若し信仰を喜んで居る人で、自分は信仰に入つてから少しでも善く成つたと思つて居る人があるならば、夫は甚だ怪しい。心の内面を省みたなら、矢張り昔の淺間しき心其儘であるに違ひ無いのです。けれども此淺間しき心は何處迄も申譯が無いが、佛を仰げは佛は之を哀み同情し、この心あるが爲めに我を救ひ給ふのであると喜びの思ひが溢れて來る。心は昔の心でありながらも其の心を謝まり懺悔する丈けが今迄に無い處であります。て信仰で煩惱が取れる、信仰で煩惱が去る杯といふ事は決して無い。信仰に入つて煩惱が無く成つたなどとは、他の人から眺めた時或は自分で他の瞬間から省みた時にア、難有いと放する言葉である。此の時の心持は即ち辨圓の所謂「山は山道は昔に變はらねどかはり果てたる吾が心哉」の思であります。即ち其の瞬間には強く自分の淺間しき事を感じ、偕て其の淺間しき我が今の如く安かに成つたは不可思議であると佛恩を喜ぶのである。

親鸞聖人は「信の卷」に於て「悲しい哉愚禿、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して定聚の數に入る事を喜ばず、眞證の證に近くことを樂しまず、耻づべし、痛むべし」と懺悔せられた。此耻づべき淺間しき心を持ちながら、而も耻づべきを知らぬは實に無慚無愧である。聖人は亦和讃に於て「無慚無愧の此の身にて、誠の心は無けれども」と仰せられた。併し若も斯の如くに淺間しき心のみにて救はるべき道が見え無かつたなら、ぢつとしては居る事は出來ぬが「彌陀廻向の法なれば、功德は十方に滿ちたまふ」茲に彌陀如來の御廻向

は前後の色々はありますが信仰の表となり裏となりて現はれて來るのであります。此の味は實に難有い所であります。

彼の無我の愛の河上華氏も亦同じ様子であらうと思ふ。氏が昨年未讀賣新聞に於て「社會主義評論」の欄筆の辭を公にして、自分の過去自分の身分等一切を打あけて喜ばれた有様は、正に感謝歡喜の極點が現はれたものである。併し今回の「人生の歸趣」の欄筆の辭に於ては、信仰は同じ信仰でも現はれ方が最早や前の如くては無い。絶對の光明は難有いが自分は何にも淺間しいと今度の於ては懺悔が著くなつて居るのです。猶ほ進んで言へば既に懺悔の時には感謝が裏に廻はつて居り、感謝の時には懺悔が裏に隠れて居るのである。夫て感謝が深かければ深い丈け懺悔の方も深くなり、懺悔の方が深かければ夫丈け感謝も強くなつて來るのです。既に昨年末に於て河上さんが今迄の一切の秘密を打あけて告白せられたあれが亦懺悔なのである。併し我は如斯く淺間しき者故に絶對の力が難有いと亦感謝に轉じて來るのである。昨年末の告白に於ては未だ如來が現はれて居無かつたが喜ぶ事は非常に喜ばれた。けれども今度のは自分喜が薄い、自分が佛でなると同じである杯とはとても言ふ事が出來ぬといふ風になつて一層落ち着いた態度である。氏が結局斯く成られやうとは私は初より豫想して居た所です。て懺悔と感謝とは要するに一信仰の両面である、若し感謝の時に懺悔の情が無かつたら、夫は即ち傲慢である、又感謝無き懺悔であつたなら夫は即ち卑屈であります。懺悔の深い丈け感謝の心も亦高い、山が高い丈け谷は深いのであります。

があつて、功德は天地十方に偏滿して、下さる如何にも難有いことである。又我々信仰に入つた當座は喜びのあまり人を助け得る如くに思ひ、佛の大慈大悲が自分の上に具はつてあるかの如くに思つて居る。併し實際になつて來ると一も行へ無い。聖人は亦「小慈小悲も無き身にて、有情利益は思ふまじ、如來の願船いませずば、苦海をいかてか渡るべき」如來の船が無かつたら我等は苦海を渡ることは出來ぬのだと、一方は懺悔一方は感謝になつて現はれて居る。又宣はく「大願海のうちには、智恵の波こそ無かりけれ、弘誓の船に乗りぬれば、大悲の風にまかせたり」と。敬虔の信仰は實に茲にあるのです。信仰に於ては、斯くせねばならぬといふ注文の分子は少しも無い。注文し無くても眞實の信仰ならば屹度行くべきの所に行けるのである。私のお話して居るのも斯くあるのであると説明をして居るのは無い。私が思ひ通りに申て居れば皆さんも又成程と喜んで下さる、其喜んで下さるのを私も喜ぶ計りであります。若し強いて言へば時間の前後の問題であるが、併し夫とて早く信仰を得たから修養が出來て善い杯との區別の點は少しも無い、氣就けば誰でも同じ信仰を賜はるので、又誰でも等しく自己の淺間しきを謝まり奉る、異はつた點は少しも無いのであります。

殊に人間として最も斷ち難きは名利の念であります。之に就いて源信和尚の話が甚だ味ひが深い、源信和尚は幼なき時より叡山で修業して遂には慧信流と言つて一個の流派を開かれる迄になられた。其の源信僧都また若い時に朝廷に上つて法を説かれて、其時朝廷より種々大層の御賜物があつた。

其處で源信僧都は早速に故郷に馳せ歸りて母君に其の賜物を  
見せられた處、意外にも母上は非常に叱られた。汝は一体何  
ういふ心で居るのか、可哀い我が子を出家させたは未來得脱  
の爲である、朝廷より賜はつた聊かの物位で喜ぶ爲めに出家  
させたのは無い、夫位の物を母の處に持ちて來て自慢顔す  
るとはどうした事か」と直に追ひ反しなされた。この爲めに  
僧都更に心を勵まして奮起せられたのであるといふ事です。  
母君が斯く言はれたからとて此時源信僧都が決して名利に迷  
つて居られた譯では無い。朝廷で法を説かれた爲めの賜ひ物  
であれば誰れ憚らぬ立派な者である。けれども此の爲めに  
僧都は更に志を立直して遂に一代念佛の一門を喜ばれた。源  
信和尚「往生要集」の序分には

夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰れ  
か歸せざる者あらん、但し顯密の教法其の文一に非ず事理  
の業因其の行惟れ多なり、利智精進の人に於ては未だ難し  
と爲さず、予の如き頑魯の者に於ては豈敢てせんや云々  
と全く名利の外に超絶して御出なさるのであります。而し其  
源信和尚は名聞の二字をば掛圖にして日々之を拜まれた、自  
分がこれ迄に成られたも名聞の導きて引き込まれたのである  
と日々喜ばれたと云ふ事でありませぬ。

親鸞聖人も亦名聞を悲しまれた「悲哉、愚禿鸞、愛欲の廣  
海に沈没し名利の大山に迷惑し云云」といふは如何にも痛切  
なる聖人の懺悔であります。併し斯く言はるゝ聖人は實際に  
於ては流罪に逢つて御出なさるのである。流罪など、聞くと  
今日の我々から見れば殉教など、随分盛んなやうにも見ゆる

らばこそ善きを知りたるにてもあらめ、如來の惡しと云は  
しめす程に知りと云はたらばこそ、惡しきを知りたるにて  
もあらめど、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はよろづのこ  
と皆以てそらごとたはごとまことあることなきに唯念佛の  
みぞまことにてははします(歎異鈔)

であります。人生の煩悶の根本は何かといふに、實に善し惡  
しの考である、我々善惡の解からぬ立場にありながら猶彼是  
と思ふから苦みが來るのであります。聖人は善惡は二つ共に  
知ら無い、只念佛一つが誠であると喜ばれるのである。又和  
讃に宜はく

是非知らぬ邪正もわかぬ此の身なり、小慈小悲もなければど  
も、名利に人師をこのむなり。

名利に人師を好むといふに到つては實に懺悔の極である、聖  
人は自分を斯く悲み又我々を斯く御誠め下されてあります。  
此度無我苑の諸君が斷然無我苑を解散されたのも、要する  
に亦此の點に氣就かれたからである。けれども自分が淺間し  
い故法を説く事が出來ぬと言ふのはどういふものか、自分が  
善く成つてから説かうと思つて居つたらば死ね迄説ける時は  
來無いてあらう、死ぬ迄善く成れる時が無いからであります。  
親鸞聖人は自分が法を説くと仰しやらぬが如來の御慈悲の  
難有さは到底人に話さずには居られぬ「更に親鸞珍らしき法  
をもひろめず、如來の教法を我も信じ人にも教を聞かしむる  
計りなり」と云はるゝ。自ら省みて自己の淺間しきを知れば  
知る程如來の御恵が彌々嬉しくて人と共に喜ばずには居られ  
ぬ様になるのであります。

が、當時に於ては決してそんなて無かつたに違ひありませ  
ぬ。法然親鸞の徒妄りに邪説を唱導して衆を迷はすに依つて  
遠方に放逐する云云といふ意味で、随分哀なものであつたら  
うと思はれる。夫てあるから聖人が越後に着きなされた時  
も誰も宿を貸す者さへ無かつた、且野左衛門の門前で石を枕  
にして雪の一夜を明かされたといふ話でも大抵は追想し奉る  
ことが出来るのであります。又聖人の越後にての御作「此の  
里に親の死したる子は無きかみ法の風に靡く人無し」の歌で  
も様子が解かるのである。かやうな具合故聖人の心中には名  
利の念杯は一分も無かつたのであるが、聖人は猶ほ自分は悲  
哉名利の大山に迷つて居ると歎かるゝのであります。

斯の如く思ひ切つて自分の弱點を言ふことの出来る人は、  
即ち自分の弱點が捨てられた人でありませぬ。已前の行爲が氣  
にかゝつて居る間はとて告白は出來無い、前に申した辨圓が  
聖人の御前へ參つて、聖人を殺さうと思つて居ましたと懺悔  
する事の出來たのは、此の時既に彼の心中に一道の光明がさ  
し居つたからであります。けれども其人自身に取つては、名  
利の念が斷ち難いと言ふより外は無い。親鸞聖人は和讃の最  
後に於て

善し惡しの文字を知らぬ人は皆な、誠の心なりけるを、善  
惡の字しりがほは、あほそらごとの形なり、

と言はれた。此は即ち「歎異鈔」の「親鸞に於きては善惡の二  
つ總じてもて存知ざるなり」と同じである。夫は何うかと  
言ふに即ち

其の故は如來の御心に善しと覺悟しめす程に知り通はした

私の如きは朝から晩迄毎日、信仰々々と言つて居るので  
ある、併しどれだけ丈け人と違つた心持ちが起つて來るかと言ふ  
に、何も無い、欲も來れば憂も來る、昔にかはらず日々淺間  
しき日暮てあります。去りながら唯難有いのは今日別に食物  
に飢えもせず、又着るに別段の不足も無く、斯の如く安全に  
暮す事の出來るのが既に廣大なる御恵みに預かつて居るので  
ある。斯く御恩を喜ばせて貰つて見ると淺間しき生活全体が  
皆如來の御賜物であります。昨日も東京監獄の死刑の人達に  
話して來た事である。成程御前方が自分は斯かる運命に落ち  
たかと思ふと心配するも無理は無い、併し今斯く話して居る  
私が、違つた着物こそ着て居れ、明日の日が解からぬ人間の  
身て無いか、如來の慈悲に歸つて見れば私も御前方も皆同じ  
事である。唯今日一日と其日々々の壽命の仕合せを喜び奉り  
て暮すより外は無いのである。今茲に百萬圓の金があつたと  
しても此の點に來れば矢張り同じ事ぢや。又妙なもので如來  
の慈悲に氣が就かぬ間は何程の仕合せを持つて居つても夫が解  
から無い」と話して來ました。私の信仰の經過は信仰に入つ  
たのが丁年三十年であつたから、本年にて既に十年になる、  
其間幾分かつて前より善く成つたかと謂ふに少なからぬ寧ろ  
御慈悲に慣れて横着になり悪く成つた方である、之は決して  
謙遜して申すのでは無い、私の内心の事實の懺悔なのであり  
ます。けれども佛陀の御恵みは實に難有い、其間にいつと無  
く眞實證の靈境も、方便化土の味も、又豫言も奇蹟の味も段  
々と解かる様にして下され、亦信仰の力に依て煩悶の取れる  
事も、又其取れた煩悶が再び來る事も知らせて下された。そ

うして佛力の大きなことは最早や何うしても疑ひを狭む譯には行かぬ、私は一切の經典に書いてある事實を皆其の如くに信ずる事が出来るやうになりました。佛陀の境界の大きな味ひは、味へば味はふ程彌々大きくして限りが無いが、限りが無い程増々難有いのです。

善導大師の『散善義』の終りを拜讀して見ると何とあるかといふに、大師が觀經の要義を作らんとして其仕事の如何にも任の重い事を感じて三世一切の諸佛に對して一心に靈驗を請はれた。すると或夜西方空中に於て、極樂の様子が悉く目に見えた。或は立つた佛あり或は座つた佛あり、語つて佛もあれば手を動かしてゐる佛もある。極樂の諸相が悉く現はれて大師の仕事が助けられた。又其夜より毎夜々々一人の僧が現はれて大師の爲めに科文を指授せられる事七日に及びて止んだと自ら書いてある。尙ほ此の外に要義製作の完成する迄に斯様の靈驗が數度あつたといふ事である。此等の不思議は何であるかといふに大師は自ら其最後に於て次の如く力強き文字を以て結ばれてあります。曰く

上來所有の靈相は本心物の爲めに於て、己身の爲にせず、既に此相を蒙り敢て隱藏を爲さんや、謹んで義の後に申べ呈はし聞を末代に被らしむ、願くば含靈をして之を聞て信を生ぜしめ、有識の觀者をして西に歸せしめん、此功德を以て衆生に廻施す、悉く菩提心を發して、慈心を以て相向ひ、佛眼を以て相看、菩提迤脊屬として眞の善智識と作り、同じく淨國に歸して共に佛道を成せん、此義已に證を請うて定め竟ぬ一句一字加減すべからず、寫さんと欲せん

は大なる誤りである。親の慈悲が難有いと自分の親の恩の解かつたが、親を認めたのである。佛陀の恵が難有いと佛陀の親を見つけた上は何うあつても其親は消える事の無い親であります。ろうして例へ罪人でも悪人でも聖人でも等しく同一の子供であつたと解かつたが親の慈悲に氣が就いたのである。夢の醒めた時に於ては、悪い夢でも善い夢でも醒めて見れば同一の味である、例へ酒に酔うて狂ひ廻はつて居た者でも醒めた後では矢張り何等の異いも無い、信仰の味は實に酔の醒めた如きものであります。此味が即ち不斷煩惱得涅槃であります。

猶一つ最後として申し度いのは、眞の涅槃は此の肉體が滅してからの未來であることである。此れが實に淨土門の特色で我々は彼の土に於て初めて佛陀と成るのであります。此の世に居る間に於て充分に慈悲を味ひ、佛境の不可思議をも頂かせて貰ふのであるが、夫れはまだ眞實の涅槃には無い、眞實の涅槃は彼の土に參つて初めて證する事が出来るのであります。釋尊は三十九歳にして涅槃に入られたが、夫れは未だ有餘の涅槃である、彌々無餘の涅槃にお入りなされたは八十歳御入滅の時であつた。此が眞實の涅槃であります。此時こそは我々も八十隨行好を具して大慈大悲を以て一切衆生を濟度する事の出来る佛果を得させて貰ふのである。今不圖思出しましたが昨晚私は妙な夢を見ました、何でも多少苦しい夢でありましたが、其夢が醒めてア、面白い事であつた、信仰に入らぬ前は夢で、入つた時は醒めたのだと言つて居るが如何にも然らだと話をして居る、さう話しを爲て居るといふ

者は一に經法の如くせよ、知る應じ、如何にも自信の強い文字だと思ひます。今日の人間は人生の立場に立ちて考へて居るから、佛陀の境界杯は到底解からぬ、解らぬから皆虚説の如くに爲て居るのである、併しながら一度信仰に入つて見れば段々と經驗して行く中に何もかも皆解かて行くのであります。

ア、私など十年間佛恩を喜ばせて貰うて居る間に、自分が一點でも善く成つた杯とは唯の一言も言ふ事は出来ぬ、唯いづも變り無き大悲の恩寵を喜ばせて貰ふより外は無いのであります。佛陀を仰ぎ奉つては感謝、自ら省みては懺悔である。感謝の時には身を粉にしても廣大の恩徳に報ひ度いと思ひ、懺悔の心に反つた時には無慚無愧の我が心中を耻ぢ入る計りである。而して此の中心は即ち佛陀であります。自分が佛陀であるとなれば感謝も懺悔も二つながら無くなつて仕舞ふ。又自分が佛陀とよそになり無關係に成つて居れば感謝も懺悔も起ら無い、信仰前の罪惡觀は即ち眞實の罪惡觀では無いのです。ア、自分が誠に悪かつたと佛陀に向つて謝まるのが懺悔である、懺悔は唯佛陀に向つた時にのみあるのであります。故に信仰の眼目は唯佛陀を眺め奉ることである、御惠みを蒙る事の嬉しやと佛陀を眺め、我が心の淺間しやと佛陀に謝まるのである。夫て信仰に入つたからとて煩惱が去るのては無いが、信仰已後に於ては其の煩悶の性質が一變して今度は立場が佛陀になつて来る、如何に心の曇つて居る時でも一念佛陀の御惠みに氣が就けば忽ち喜の心と一轉するのであります。併し其佛陀を自分でこさへるもの、様に思つて居る

夢を又見て居つたのです、二重の夢に成つて居つたのです。丁度人生も斯の如きもので、吾々信仰に入つた時は三毒五欲の夢が醒めたと言つて居るが、猶未來の眞實證に對すればさう言つ居る事迄が又夢の中の出来事なのである。斯んな具合の夢を見たのは私には昨夜が初めてです。信仰に入つた當座はさながら自分が佛に成つた程の喜であるが、夫がまだ佛の大慈悲を味ひながら夢を見て居るのである。此の世の縁が盡きて一生が終り、大涅槃を證する時こそ眞實に長夜の夢の醒める時であります。

ア、度々言ひますが私は三年前父の死ぬ時に初めて最高の理想は淨土にある事を知らせて貰うた、其時父が「御前はまだ娑婆が捨てられぬか」と叱られたが、如何にも私など宗教を説けば其宗教が捨られぬ事になつて来る。何處迄も淺間しい事でありませぬ。

要するに近頃諸方面一時に信仰問題が起つて來たのは決して悪い現象ではありませぬ、初は光明中に浮んで居る形であるが段々躓き／＼して行つて善く成る事と信じます。感謝の裏には懺悔あり懺悔の裏には感謝あり、感謝が強ければ強き程懺悔も強く、懺悔が深ければ深き程感謝も深くなるのである、之が信仰の有様であります。

一、仰に時々懺悔することあるとも往生すまじきかと疑ひ歎くことあるべし、然れども、もはや彌陀如来をひとたがひたのみまゐらせて、往生決定のものなれば、懺悔おほくなることあまじしや、かゝる懺悔おほくあるものなれば、御たすけは治定なり、ありがたや／＼とよろこぶことろを他力大行の催促なりとまふすと仰せられさふらふなり

（近如上人御一代開書）

聖傳

ジャータカ釋尊傳

三出家

一日未來の佛陀遊園に行かんと思ひ立ち、車を命じたまひぬ。馭者畏こみ、勝れて美しき車に裝飾をつけ、シンドヒ種の四匹の丈高き、白きこと玉蓮華の花辨のごとき馬をつけ、菩薩に用意なりしを告ぐ。菩薩車に乗りたまひ、天の宮殿のごとく洋々乎として花園の方に出てゆきたまへり。

天使等は若き悉達多の爲に、時こそ來れ、いでわれらをしてかれに前表をあらはさしめよとて、一人の神の息子を老衰したる人にみせかけぬ。齒は抜け落ち、白髪みぐるしく、体は屈みて折れ、杖に縋り衰れる態なりき、されど彼はだゞ未來の佛陀及馭者にのみ現はれたり。

然る時菩薩は馭者にむかひたまはく、「こは如何なる人なりや、髪は他の人の如くあらざるに」と、君臣の答をさきたまひて、「さらば長ふることは耻かしきかな、かく各人の老衰の著るさ上は」と、亂れし心もて其場より立ちかへりたまひぬ。

王我子の疾くかへり來しを怪しみて馭者に其理由を問ひ給ひぬ、かれは老人をみたまひて世をいとひたまひしなるべし

と答へまつりしに、「あゝこは予を惱ます甚だし」とて帝は悲嘆したまひぬ、「速かに衆を集め我子の面前に於て音樂を奏し遊戯せよ、歡樂をつゞくる間は少なくとも世をすてんの念を翻すべし」と而して又術者を増加して半リーグの隔に置き給ひぬ。

又菩薩程經て遊園に行かんとしたまひしに、神によりて、あらはされし病人をみたまへり、彼は以前の如く問ひ又以前の如く、亂れし心もて立ちかへり宮に入りたまひぬ。父王益々憂ひて又以前の如く王子を慰さめ術者も此度は三分の一リーグの隔にせきたり。

次に又菩薩遊園に行かんとしたまひしに神によりて現はされし死人をみたまへり、憂鬱なる心もて宮に立かへりたまひしかは父王慰安に力を盡し術者を益々増加したまひぬ。

再び未來の佛陀遊園をゆかんとしたまひし時極めて質素なる衣まとひし沙門をみ給へり。「友よ如何なる人なるや」と問ひたまひしに此時馭者は如何なる種類の人なるやをしらざりしも、神力に催されて「こは托鉢僧といふものに侍る」と告げ、なほ出家の利益を説きぬ、其日こそ佛陀始めて出家の思を懷き、恙なく樂園に行きたまひし日なれ。（されどタイカニカイヤの記者は同時日に四つの前表をみて樂園に行きぬといへり。）

遊園に日中種々に慰さみたまひて後菩薩は美しく清き湖に浴したまひぬ、日暮に衣を着すべく玉座の石上に座したまひしに侍者等種々の色の衣、各種の裝飾、花束、香物、香油をもち來りて彼の周圍に立ちぬ。

其時天使長サツカの坐せし玉座温かになりぬ。（印度佛教の昔話に大切なる人の生涯に於て危険なる事あるときは天使長サツカの座は温かになるといふ。而して彼の現世の幸福を失はん事を恐れて直に天使長自身降り或は他の使を降すといふ）おもへらく「我にこゝより下るべく要するものは誰ぞや」と、かれは未來の佛陀の爲に裝ふ時來りしを悟りぬ、されば、かれはサツカマに曰く、「友なるビサツカマよ、若く貴き悉達多は今日眞夜中出家するなるべし、この度はかれが立派に裝ひたまふ最後の時なり、遊園に行き、天の裝束もて彼を飾るべし」と、されば天使の有せる奇しき力により、ビサツカマは時に從ひ直ちに王室の剃髮者に身を扮して王子に近づき剃髮者の手より頭巾をとり、菩薩の頭の周圍に巻きぬ、かれの手が菩薩の頭にあたりし時菩薩「こは人に非ず神の子なり」と悟りたまへり、頭布の初めの一卷に於て寶冠に於ける寶石の形に一千の褶出來たり、第二巻には又一千の褶おこりぬ、かくして思の及ばざるまで小さき頭に於て頭布に無量の褶みえたりき。褶の最も大なるものは黒きブリヤグ葛の花の如く、其他はクツムバカの花のごとくなりき。而して未來の佛陀の頭は恰かもクイヤカ華の満開のごとくなりぬ。

而してかれ出來うる限りの莊嚴に於て飾ざられしとき、樂師は各々妙技を盡して音樂を奏し、又ブラーマン等は歡喜と勝利の言葉をもてかれを褒め稱へ、下民等は祝賀の聲と稱贊の叫聲をもつて敬ひ貴みぬ。而してかれは彼の聖なる麗はしき車に乗りたまへり。

其時王スドホダナはラーフラの母が男兒を生みしを聞きたまひ、使を送り曰ひけるは「我が息子に我が喜びを告げよかし」と、未來の佛陀こそ聞こしめし、障礙は人となりぬ、情縁は人となりぬ」とのたまへり。王これを聞きたまひ「然らばラーフラ(障礙)を以て我が孫の名たらしめよ」と命じたまひぬ。

やがて菩薩は美はしき車に乗りつゝ、大莊嚴と非常なる榮光を以て市街に入りたまひぬ。其時貴嬢キサトゴタミといへるがのが宮の高級の看樓にいて、菩薩市街を進みたまひしとき其美と威嚴とを觀たり、其光景を大に喜び、歡びあふれて歡喜の歌を口ずさみぬ、曰く

かく御榮あるこの君を有したまふ  
其母は實に幸なり  
其父は實に幸なり  
其妻は實に幸なるかな

と、こをき、菩薩もみ給へらくかゝるものを見て、かれの父の心は幸になされ、かれの母の心は幸になされ、かれの妻の心は幸になさるべしとや、こはかれの云ひし總てなり、されど誠に何によりてか、各の心に於て、永久の幸福と平和を得能ふべきと、かくして罪より離れたる彼の心に答來りぬ、曰く貪慾の炎滅したるとき平和は得らるべし、憎と邪念の炎滅したるとき初めて平和は得らるべきなり、驕慢や妄信や又他の罪より起りし心の煩悶止みし時始めて平和は得らるべきなり、あゝ此唱歌者の我にさかしめし教へは實に美しく樂しきかな、如何にとならば、我が見出さんとする所の絶對の平和即ち涅槃の故に、正しく此日我れは家庭より斷ちて出家す

べし、我は涅槃のみを追求すべきなり」と。然して百千の價する眞珠の頸飾を頸より解きキサゴタミに師の禮として送りぬ。これを歡びて彼女思へらく、王子悉達多は妾を愛慕したまへり而して妾に此贈物をなしたまひぬと。されど菩薩は嚴かに彼の宮に入りたまひ、王の寢台に倚りかゝりたまへり。乃ち婦人等は麗はしき衣装を着、歌舞に巧にして天女の如く愛らしきが彼等の樂器をたづさへ、調子よく曲を奏つゝ、舞踏し唱歌し、又嬉しげに遊びぬ。

されど菩薩は罪より心遠ざかり、此の光景に於て快樂をとりたまはず、眠りたまひぬ。婦女等互に囁やきて曰く、彼の爲に我等かく爲せるを彼眠りたまひし上は、もはや我等遊戯する用なげんと、彼等のもちし樂器を傍に置き眠るべく臥しぬ。

燈は恰もよき香の油將に盡きて消えんとせり。菩薩眠さめたまひ寢臺に跣踏し、所有物を傍に置きつゝ、眠れる婦人等を見をなはしぬ。或は口に泡を吹き或は齒を軋らせ、或は歪み、或は譫言を云ひ、或は口を開き、或は衣を取り亂し、人の淺ましき様を明らかにあらはせり。この恐ろしき容貌の變化を見たまひ、かれは益々愛慾を捨てたまへり。又かれには、サッカの天に於ける宮の如く美麗なりし室も厭ふべき屍もて滿ちたる骨堂の如くみえ初めぬ。五欲を貪れる世に於ても有形無形の世界に於ても、生命といふものは實に炎の餌となれる家に上るが如きのみと、深刻なる嘆聲は口を衝きて出てぬ、總ては皆我を壓制するものよ、堪ふべからざるものなりと、かくて彼の心は熱心に世を捨てし人の状態に傾むき今日此日

正しく出家の本懐を遂ぐべしと決意したまひし、かれの寢臺より立ち戸に至り、「そこなるは誰ぞ」と呼びたまひぬ、侍者チャナンナは頭を闕に着けて眠りたりしが、そは我チャナンナりと答へたり。

然る時王子曰はく、「われ今日世を捨てんことを決しぬ——馬に鞍置けと、チャナンナ厩に行き燈の光により偉大なる駿馬カンタカのジャスマン華の模様ある美き布蓋の下心地よき場所を立てるをみとめぬ。これこそ我が今日鞍おくべき其者なれ」とてカンタカに鞍おさぬ、彼馬に鞍おく間に早や馬は知りぬ、「彼は今日かく固く我に鞍おけり、而して他日遊園に行きし時はかくの如くならざりき。如何とならば我主今日出家せんとしたまふが故に」とて心にいと喜ばしくかれは大なる嘶聲を發しぬ。其響全市街を通して聞こえしなるべきも神は其音を止めて誰人をしても其響をさく事を得しめざりき。偕菩薩はチャナンナを使に送りし後「われは我息子を目見るべし」とてラフラの母の室に行きたまひ彼女の部屋の戸を開きたまひぬ。此時善き香油もて燃えつゝ、ありし蘭燈は内房に於て幽かに光りを放ちつゝありき、ラフラの母は多くのジャスマン華もて敷きつめし寢臺に彼女の手に彼女の息子の頭を休ませつゝ、眠りたまひぬ、菩薩は彼の足を闕に踏み止めおもひ給はく、「あゝもし我れ我が息子を抱くべく彼女の手を動かさば、彼女は目醒めて我が出立の妨となるべし、われは佛陀となりしとき歸り來り彼れを見るべし」とて、宮を去り給ひぬ。

かく菩薩宮を去りたまひて、彼の馬に行き、宜ひけるは「我

が善良なるカンタカよ、汝此夜一度我を救へよかし、然らば、我汝の助により佛陀となり人世を救ひ、又天使の世界をも救済すべし」と而して馬に乗りカンタカの背に跨りたまひぬ。カンタカは長さ頸より十八キュービットあり高はこれに應じ強く疾くして清きチャナンナといへる貝の如く全身悉く白かりき。若し彼嘶き或は地を踏まば響全市に聞ゆべし、されば天使等はかれの嘶聲を包み彼の一步一步に彼等の美しき掌を馬の足の下に置き音を防ぎぬ。

菩薩は偉大なる馬の偉大なる背に乗りて進みチャナンナに其尾を捕へんことを命じ市の大門に真夜中達しぬ。

父王は常におもひ給はく「菩薩は如何なる時と雖市門を開きて外に出づると能はじ、彼の出でざる様二つの門に於て一千人づゝの衛者を置きたり」と、されど菩薩は偉大にして強くましまし、十千萬の象にも比ぶべく又一億の人にも比べて類なかりければ、菩薩ももひ給ふ様、「もし戸開かざればチャナンナにかれの尾をしかと握らせカンタカに乗りしま、われは馬を我指趾もて壓しつゝ十八キュービットの高さの市砦を飛越えて外に出づべし」と、チャナンナもへらく「我はわが主を我が頸に取りわが右手にてカンタカの腹帯を持ちわが腰に近づけて我一心を以て市砦を乗り越すべし」と、カンタカもへらく、「もしも戸開らかざれば、われは主を背に乗せまいらせ、チャナンナに尾を捕へさせ我は市砦を飛び越すべし」と、されど門に永く住める天使は戸を開き置きぬ。其時、マール菩薩を止めんとて來り、空中に立ちて叫びぬ、去る勿れ、あゝ我が主よ七日の内に國に大慶あり、即ち汝は四大陸とそれ

に隣れる二千の小島の主となりたまはん、止りたまへ、あゝ我主よ」と「汝誰なるや」と彼は曰ひぬ、「我はバサバツチナリ」と答へぬ、「マールよ我は我に大慶來る事を知れり、されど我が願ふ所の威力は其の如きものに非らざる也。我は佛陀となり、數千の世界をして歡喜の爲に叫ばせしめんことを我願なれ」と、然る時惑者自身おもへらく、「自今以後、貪欲、怒、或は罪惡の思ひ汝の中に出て來らば、我れそれを知るべし」と彼れに従ひ蔭の形に添ふごとく密接に見護りつゝ行きぬ。

されど未來の佛陀は、彼の容易く得らるゝ世界の王國を輕んじ唾棄して勇ましく七月一日アーサールの満月の日に市を去りたまへり而して今や市を見捨てたまはんとせしとき、そを今一度眺めばやとの願、心に起りたまひぬ、而してかれ然したまひし其時廣き世界は陶工の車輪の如く回轉して止まりぬ恰も彼に對して曰ふ如く「あゝ大聖靈よ君の爲に君の願をみたしたまはんに止まるべき要なし」と、されは菩薩は唯御顔のみを向けて市を眺めたまひ、カンタカをかれの行かんとしたまふ方向にむけつゝ進みたまひぬ。其時に天使等は六萬餘の火把をもちて彼の前後左右に侍せしと云ふ、又地平線の遠きに於て諸神亦火把を高くか、げぬ、又他の神々や有翼の動物又人類以上の生物は天の香物、花環、白檀の粉末又は薫物等をもちて彼に伴ひぬ。而して全天は黒雲の將に雨を降さんとして集まれるが如く、インドラの天よりバリツチャータカ華もて満たされたりき。天樂は周圍に溢れ而して何處も數千の樂器響きて恰かも海の真中に於て雷鳴り渡る如く、又大洋

のすさまじく岸を打つにも似たりき。

此華美と榮光に於て、進行しつゝ、其一夜に三王國を横ぎり、三十リグの終りにアノマーとよぶ河の岸に達しぬ。されど何故に馬は遅々として進む能はざるにや。そは疲れたるにあらず、如何なれば、彼は九き世界の一方より他の世界に行くこと恰かも傍にある車輪を横ぎる如く容易に行く事を得、而して午前中にかへりきて用意されたる食を喰ふを得たりき。されど今日は天使等によりて惜しげもなく天より投げられし花環や花の塊もて蛇及他の醜き動物を蔽ひ隠され馬の腹部をさへ隠されしかば馬の歩みいと後れたるなりき。

今菩薩は河岸に止りたまひ、チャンナに向ひ、「此河は何と呼ぶや」と問ひたまへり、「我が主よ、アノマーと呼ぶ」と答へまつりぬ。「然らば我が世を棄てしことも、アノマー(卓越)とこそ呼ばぬ」と馬に合圖して踵もて馬を壓すに、馬は廣さ五六百ヤードの河を飛び越えて向ひの堤に着きぬ、馬の背より下りたまひて菩薩は、沙の河邊に立ちたまひ、チャンナに宣はく、「チャンナよ汝こゝより我が裝飾とカンタカを取りてかへれ、我は隱僧とならんとす」と、「されど主よ、我亦隱僧となるべし」「汝は世を捨つるべく免されず、汝歸らざるべからず」と宣ひ、かれの裝束とカンタカをかれに渡したまへり。又「われこれらの旋毛は出家にふさわしからざるが故に我、我劍もてこれを斷つべし」とて右手に劍をもち左手に鬚を捕へ寶冠と共に切りはなちたまひ又鬚をも然したまへり。菩薩獨語したまはく、「もし我れ、佛陀とならば空中に止まれば然らざれば、地に落ちよと、髪と寶冠と共に持ちて、

空中に投げぬ、寶冠と髪とは一リグ斗りも飛び行きしが地には落ち來らずして空中に止まれり。天使長サツカは彼の聖眼にてこれを認め、そを寶石箱の内に收め入れ、天に置きぬ。

よき美しき響りの髪をきりすて、  
貴き主は空に投げぬ  
千眼を有するサツカ空神  
そを恭しく金の箱に受けたまひぬ

再び菩薩もへらく、此のマヌリンの上衣は僧として不相應なりと、今天使長ギヤーチカーラは菩薩昔カサツバ佛の時に於て、以前に友たりしなるが些かも老ふることなかりき。曰く今日我が友は家を棄てたまへり。われは彼に行き隱者の入用なるものを備ふべし。と、

三つの衣と托鉢と  
剃刀、針、帶、  
水瓶の八つこそ實に  
信仰篤つぎ行者の富なれ

とてこれ等を取りて皆菩薩に送りぬ。菩薩は羅漢の形に裝ひ、出家の聖衣を着したまひ、チャンナに去る事を命じたまひぬ、チャンナは菩薩を敬ひ禮して、別れぬ。カンタカは菩薩のチャンナに談りたまふに耳かたむけしが、自今以後主にまみゆる事能はざるを知り、悲嘆堪へがたき様なりしがやがて影見えざるや、忽ち失望の爲死しぬ。後に天上にカンタカの名をもつて天使に生れしと云ふ。チャンナこの時迄悲しみは單つなりしも第二にカンタカさへも死したるが爲に、悲しみ哭しつゝ市に歸りぬ。

告白

撮取

岡田 彌 作

私は限り無き大慈悲より照されつゝあつた事を知らしめて貰ひ、實に堪へられぬほどの喜を得ました、誠に感謝に堪へない次第で有ります。

私が今斯く筆を採り、此事を書きつゝあるを御覽になつて憐れんで下されませぬ、私の事をば決して御見捨てなく、唯々御慈み下されます、私は實に謝すことが出来ませぬ。

此度近角先生からそれを告白せよと云ふ仰せを蒙つたので、誠に生急氣の極ではあります。遠慮なく喜んで居るそのまゝを述ぶる事にしました。

丁度昨年の十二月下旬であつた、僕の殆んど煩悶の絶頂であつたのは、遂に未だ一回の拜頭をも得ない全くの他人なる先生に突然と自分の煩悶の赤線々を陳述して考へを乞ふたのであつた、順序としてその煩悶を記して見よう、要するに斯ふてある世の中には深山の道があつて、何れが何れやら分らぬ、佛教は佛教で理がある、哲學も哲學で理がある、哲學は哲學で、科學は科學で、その他なんでも悉く相當の理風はある。そして各々他を否定する。聞けば尤もなことである。又無理な處もある。そんな論じ合ひをするようなことは、未だ眞の道ではない、屹度古聖の未だ發見せざる一大眞理が宇宙に含まれて居るようでない。現在の宗教や哲學では満足が出来ぬ。何でも未發覺の眞理を自分で發見して之に安んずるより外はないと考へたが自分の力を省みると、誠に堪らぬ、故に一步を譲つて現在の道を悉く研めそして、之れが確に眞理であると定めた後にそれに安住しようとしたが、之れも自分の力を省くと不可能である、昔しから偉人と云はれた

人は、何れも自分よりは勝れて居るものを一つのみならず、現在して居る幾多の道を涉ると云ふことは到底不可能の事であると考へ盡した末、一寸自分の成立に就て氣が付いた、自分は親の子である、心身共に親から分れたものである、然らば親の信することを信じたなら其いてはならない、たとひそれが誤信だつても迷信だつても構はない、親と共に樂しむなら何が不足であるかと云ふように極めた、其晩が大に愉快で此時程心よく眠つたことは近頃なかつた。

然るに翌朝になつてから不安でならぬ、この様に定めて仕舞へば自分はそれでよいけれども他の人も矢張り親の信を信ずるとなれば自分とは別である、是れては同じく道が澤山ある譯で一向安心が出来ぬ、而し自分では之れより外は無此の法は實に自分で究めて、究め盡した結果の斷案である、その眞理で不安心ならば仕方がない、も一絶望である而かも死と云ふ運命は遠慮なく襲ふて來ると想ふと丸て氣が狂ひそうになつて來た。耳は鳴る頭が熱して來る殊に後頭部が烈しかった、もう堪らなくなつた時に先生と云ふ事に氣が付いた。それは昨年歸郷當時左の處で新佛教と云ふ雜誌を見た事がある、その何號であつたか覺えぬが附録として未來の有無を現代知名の人士に問ひ合せてその答を載せたもので中に先生の答がある、曰く「有ると信する、その動機は此の親」と云ふように自分は覺えて居つた此の親と云ふことである、どうも自分の究めた親に似て居るようであつた、なんだか百萬の味方でも得た様な氣がして希望が妙に湧いた、そこで早速自分の此の信が果して是か非かと云ふことを先生に伺ふことに定めた、その時は禮のなんのと云ふようなことが云つて居られない、一片の紙面で突然と先生に質問すべく投函して仕舞つた。

その投函して後に自分で又考へた、先生には屹度自分を馬鹿な奴であると冷嘲されるであろうと大に後悔をしたが、而しどうも仕方がない出来て仕舞つた事であるから諦むるより外はない。且つ想ふには人から聞いたのは矢張り其の人は自分の信する方に都合のよい事を云ふてあるからどうせ自分で解決せれば安心が出来まい、唯考へてにせうと、自分は更にそれより一生懸命に考へ初めた、嘆異鈔等を見たもの、嘆異鈔と雖も我田引水である、そんならそれを信するのは無上の真理ではなく盲従するのである、盲信するのと考へつゝも、僅かに親の信を信すると云ふ理由で嘆異鈔を拜讀したが一向慰められない。第一親の信を信すると云ふ事が不安であるからであつたらう、それから自分はその親の信を信すると云ふことを誰でもよい少しく、知名の人が是認して呉れたなら嘆異鈔の妙味が大河の流るゝが如く滔々と自分の心に入るのである、早く先生の返事が見たいと單にそればかりが唯一の綱として憑つた。而かも中心に於てはどうも人から聞いて安んずるのでは深くない、そんなことは進歩と云ふ事に反して居る、眞の安心はすべき處は充分にし、そうして安んずるのである故に。大に煩悶を連ねすべし等云ふ心があるのであつた。

けれども自分では出来ない若しその以前に死ぬ様な事があつては取返しが付かぬ實に其の苦しさ、今から願へば憐れでもあつたが、誠に滑稽である狐にでもつまゝれた様である、而し當時は何の意氣も消失して仕舞つた、單に生きて居ると云ふに過ぎないのであつた、最も眞面目の時代は此頃である、彼れ是れして十日以上を經過した、勿論其の間には元日等も向へたが少しも愉快でない、人が嬉しそうにして居るのを見て腹が立つ癢に觸つてならなかつた、正月の十日頃迄その儘、十二日か三日に先生からの御便りがあつた、どんな福音が含まれてあるか披くのが惜しいような氣がしつゝ、拜讀した處が先生には御嬰兒様の不幸に遇はせられ、その爲めに返事が延引した、唯今も色々と思ひ等する内に僕の手紙の事を

の態度でも執られたいのであつた。今から想ふと實に僕は自分の淺墓な考へ許りであると云ふことがしみじみと分つて來たのです、茲に更めて讀者諸君の前に於て先生に謝罪します。

その後私に大に煩悶を擧げた、矢張り前の如く修養に於ては決して人から聞いたのは駄目で、自分で充分究めたのでなければ價値がないと極めた理由に従つて愈々煩ひ、悶へた、そしてその理由を根據として居るから、幾ら本を見て感ずがない感じがあつても忽ち打消されるので、自分に都合の悪い本や、修養に對して(自分の所謂)邪見になるような修養談等は決して感じがないので動かなく大に愉快であつたが自分に對して救済の慈音や安心に就ての確有の經文等に接した場合、甚だしく束縛せらるゝ之には自分非常に困らしたのである、先生から仰せられた如來爲一切云々の有難い言葉も人から聞いたのは駄目であるの理の下に少しも心に入らぬ、有難く感じて自分如來から直接に聞いたのではなく人が言ふのであるから都合よくこしらへたものかも知れぬと思ふから何の妙味もない、その苦悶が長く二ヶ月以上にして二月十五日前後になつた、處がなんだか自分が是迄極めたことが偏面て間違つて居るやうに氣が付いたそして十八日の晩になつた、つくづく考へて見るとどうして間違つて居る。

假りに自分が人から聞いたのでは駄目であることが正しいことであると假定すれば自分以外に目撃し又聴き分け等し、自分の心に入るものを悉く否認せねばならぬ、別に否認するも差支はないがそれが果して完全の觀じ方であらうか。

一體自分は昨年來理屈は遂に假物で如何様にも究めることが出来るから、吾々の安住處ではないと云ふことが臆氣ながら心の底に萌し掛つたのである、それは勿論自分で考へたのではなく色々諸の善智識や學者から聞き入れたものではあるけれども、斷然自分と斯く感じたのは實に昨年來である、そこで自分の死の恐怖なる迷(世の人が云ふ處の)も自分は理屈でき

想ひ出させられ床からはね起きて佛の御催促と想つて述ぶるとの仰せの下に、

外はありませぬ常に佛様は吾々を憐んで下さる

如來爲一切常作慈父母當知諸衆生云々

との御手紙であつた、此の御手紙を拜讀して自分は考へた、どうも間の悪い處に手紙等を差上げたものである、先方は兎に角自分が不幸に遇はれたと承つてはどう處置したらよからう悔みを送る等も自分は出来ない而し知らぬ顔もされぬからと云ふて心にもない悔みを述べ立てるも變である、第一自分は一向なんの感じも無いと云ふのは何と云ふ淺ましい心である、寧ろ自分の實際を申し上げた方がよいと、自分が一向に感じがなく他人の不幸等は普通の事で、自分が死ぬのが嬉しくないと云ふ事と、それから御手紙の中に如來は一切の爲に慈父母と作り玉へり云々の有難い仰せを承はり、自分が親の信を信すると云ふのも如來が親の信を信するべく親と作り玉ひたるなりと想へば少し嬉しい氣が起りもしますが、一方耶蘇教や其の他の教へてもそんな風に想ふならば、矢張り道が澤山あつて依然として不安であると云ふ恐れ多い疑ひを如來に又先生に掛けて再び御便りを願つた、そして其後自分は何回も御手紙を繰返して拜讀したが少しも慰められないと云ふのは前に人から聞いたのは價値がない自分でする處迄爲し自分で安んずるのが、進歩であると云ふ様な極く偏屈な考を以て居つたので、先生から彼の如き温かき手段を戴いても少しも感じがないのであつた、寧ろ不足に感じて居つた、經文等から仰せられず一つ實感でも説かれて自分の是非を攻撃

めては完全なる安心ではない、矢張り死の恐怖は恐怖として認めねばならぬ之れこそ動かすことの出来ぬ實際問題である而して後安心を得ることを決して間違ひのない確實の事であると自分は想つて居る、然るに自分は此の事實問題を究むるに理屈(空想)を以て對したのである、即ち自分以外から聞き見して安んずるのは駄目であると云ふ想像を以て對したのであつた、實に矛盾も甚だしい。

それが十五日前後から十八日に掛けて氣が付いた、そして十八日に自分は斯く決した、自分が自分以外のものを否定して見ないのは、それでもよいが、而し自分の觸覺に觸るゝ幾多の現象は果して無いであらうか、否自分に觸覺する限りは必ず有るものと認めて決して間違はない、處が自分が是迄世の中に獨りばかりであると感して、淋しく心細かつたのが愈世のあらゆる現象があると感じられたから、急に裕かになつて來た同時に社會が懐かしくて堪らなくなつた、國家もある社會もある親もある世に經典もあるなんでも目に觸れ耳に觸れ苟も五感に接するものは悉く有ると認めた、非常に嬉しい、其晩はゆるやかに眠つた翌朝、愈々嘆異鈔も確かに自分の觸覺に觸るゝ限りは有るのであるから、少しも疑ふことがないとして拜讀何心なく九章目の

今迄流轉せる苦惱の舊里は捨て難く未だ生れざる安養の淨土は戀しからず候事、誠によく煩悩の興盛に候にこそ、名残り惜しく思へ共、娑婆の縁盡きて、力なくして終るときに、彼の土へは參るべきなり、急ぎ參り度き心のなきものを殊に憐み玉ふなり、是れに就けても、いよく大悲大願

は頼もしく往生は決定と存じ候へ、踴躍歡喜の心もあり急ぎ参り度候はんには煩惱の無きやらんと怪しく思ひ候ひなまじと云々

實に私は云ひ知れぬ涙が急に流れた、自分で幾ら止めようとしても止まぬ何事も無い幼い時分温かき母親の懷に抱かれたと同じ心になつて仕舞つた、今迄の苦悶も何も悉く洗ひ去られた、實に氣がすがすがしい、そして大に希望が湧いた、今尙其時の事を願ひ出すと熱い涙が流れ掛るのである、あゝ、

急ぎ参り度き心のなきものを殊に憐み玉ふなりと承はつては泣かずには居られぬ、自分のような執拗な而かも芒蕪な煩惱にばかり堅められたこのような奴、どうして社會を棄つることが出来よう、勿論自分を棄つること等は以ての外である、此の私なればこそ殊に憐み玉ふなり、何共仕方がないどうしたらよいか分らぬ、あゝ自分は百年も億年も存生したい、實に未だ生れざる淨土をこいしからぬ、どころてはない、安養淨土の存否をも知らない、よく／＼煩惱の興盛である、急ぎ参り度き心のない自分のような奴を殊に憐み玉ふなり、實に堪まらない、感謝も何も及ばぬ、此事は自分は余り人に發表する必要もないが特に先生に限り大に御心配を掛けましたので、忙はしい先生が僕のような奴でも、忙はしい中にも案じて御出でたろうと思はれたから、早速先生に丈け御知らせ申したのであります。處が先生からは直ぐと御祝の御手紙を下された、外に先生が御殿父様と御永別當時の感想を載せられた求道一部とを賜り讀めとの仰せてあつた、僕はその時染し／＼感じました、自分のような同情のな

のはどうも自分で首肯されない、方便或る事に向つてであるようにしか思はれないのである。誠に如來に對して濟まないが、而し己むを得ない自分で大に情け無く感じて居る、けれども自分は信じて居る、このような、自分が佛の不思議をも感じられない、即深い奴なればこそ愈々大悲は憐んで下さると、死に角自分で佛に任すも任せぬも、どちらにしても救済は間違がないと感じられて居るから、餘り重要問題ではない、だん／＼大悲の御力が自分に垂れ玉ひて、遂には悉く心身共に大悲の御力のみで成立したものであると云ふことが分るようになるであらうと思つて居る。

處て此間嘆異錢に

本願にほこりて作らん罪も宿業の催ほす故なりされば善きことも惡しきことも業報にさし任せ偏に本願を頼み参らすればこそ他力にては候へ云々

と云ふ有難い御言葉を受けて、自分は釋然として無限の大悲悲であること云ふことが心の底迄浸み渡つた、今迄自分が大悲であると頂かねばならぬの仰せに逆つて、救済が間違ないから、大悲の御力であると感ぜられなくとも差支はない等想ふて居つたのは全く願にほこりて作つた罪である。而かも大悲は、そは宿業の催ほす故なりそんなことに頓着せず業報にさし任せ偏に本願を頼めよそれでこそ他力であると嘆異錢を介して仰せられてあるのだ、あゝ。

大悲の前にはどんな悪人でも駄目である、又どんな善人でも駄目である、誠に讀し切れぬ無限の慈悲である、今や自分は如來でなければ助かれぬと覺悟した、且つ自分の理想たる自然のまゝで、即ち事實は事實と認めて安心するのでなければ圓滿の安心ではないと云ふ意と適合して居る、實に嬉しう、縦したとへ我如來以外に自分の理想と適合した處の、救

い向ふ見ずの、人が不幸に遭はれたにも拘はらず、少しも感じのないような奴をばどこまでも御憐み被下て而かも、自分のような奴の喜びまで共に御喜び下され、外に色々御教訓下さるとは何と云ふ御方であらう自分でばとてもなれない、自分は人が自分に少しでも善いことを仕向ければ、何か爲めにする處があるのでなからうかの何のと却て疑を掛る極めて小人である。それが何と云ふ有難いことであらう。大悲からは救けらる、先生からは喜ばれるとは、と感慨深くして一寸謝禮の手紙を認むる氣にもなれないのであつた、同時に先生をなんだか懐かしくなつた、そして手紙の末に仰せられた「皆々如來の御淨土にて拜顔するが何より楽しく候」を自分では忘れられない、御淨土の有様が目に映ずる、自分の祖母等が病で死なれたが、又自分の幼弟もそれであつたが今頃どんな風にして居られるだらう、祖母は矢張りあの褥中にあるような姿で吾々を見て居らるだらうか、幼弟は今頃、矢張り娑婆に居る時の如く祿に廻はらぬ口で何か話して居るだらうか、等とそれを想ふと自分もなんだが早く参りたいような氣もするのである。

以上が私が苦を得た經過であります。序であるから自分の想ひつゝあることなも一つ告白しませう、前にも申しました如く自分は事實は事實として認めて居ることが最も安全で且つ容易であると思つて居つた。そこで自分が此の喜びを得たことも直に如來の斯くなし玉ひたるものと事實は信ぜられない、矢張り因果律で律したく、想つてあつた、そこで、遠く宿縁を喜べしと先生から仰せられたことは大に忝く自分は味いませう、世界何物か佛の賜ならざるべき」と云ふ點ははたしく快く想はれない、勿論如來に對して濟まないとは思つて居るが而し歸も歸らずに如來の成さしめ玉ふなりと信ずる

濟主があるとしても、私は忠臣は二君に仕へず、もう斷じて依らない、否々依りたくなつても差支はない大悲は無限(無限に二つはない)の慈悲ではないか常に／＼憐み慈しみ玉ふ、あゝ私は無限の慈悲に懷かれたり、之れから考へると世の澤山の道悉く慈悲の内に含まれて居ると味はれる故に、一切の衆生が何れも自分と同じくいつかは救はると想へば、皆自分の友達のような氣がして懐かしい愉快でならぬのである、此の事から推し奉れば、あゝ矢張り世界何物か佛陀の賜ならざるべきと私は今斯く記しつゝ、感じられました感謝。

實に私の心程動くものはない、而し之れ業報の催はす故也そんなことに頓着することはないのである、偏に本願を頼み参らすればこそ他力であると味へますと事實に如來の慈悲の如何ばかり大なるかを計り知ることが出来ないほどである、單々無限絶體の慈悲佛であると信ぜざるを得ない、既に絶體無限の慈悲である如何なる慈悲なる善も決して佛には何等の痛痒も感じないのは當然である、僕はこのような善惡どころではなく、一に死の恐怖と云ふことがある、然るに此の恐怖あればこそ殊に憐み玉ふであると承はつたからには、善惡等には餘り關はりはない、而し社會の存在を認めた限りは善惡と云ふことも起つて來る、自分は今後如來の御力により社會に活動するのである、たゞ自身の力は認めず偏に佛の御力に依り行つてゆく斗りである、たゞ佛にせば業報も感ずること能はず、たゞ己の爲すべき道を佛が自然と行はして下さるのである。煩惱熾盛の衆生なれば常に間違つたこと斗りして居るであらうが佛の御力によりて又直ちに間違も氣附かせていたゞるのである。

あゝ此のような自由が又とあらうか私は若し慈音に接するところがなかつたなら悶え狂へて死なねばならぬのであつた何たる多幸であるか自分には此の自由を許された。あゝ感謝に堪へない次第である、處が自分にはかり垂れられたのではないので有りとし有るもの悉く常に憐んで下さる如何なる事があ



つても、無限の慈悲は止み玉ぬ絶体の慈悲である、耶蘇教を信じて如來の慈悲を知らぬものでも無限の慈悲は捨て玉はぬいつかは必ず救ひ玉ふ、自力に迷ふて苦む人をも決して佛は見離し玉はぬ却て憐んで下さるのである、大悲は今頃さぞや心を勞し玉ひつゝあるとてあろう。

先生からの御教示にも

如爲來一切常作慈父母當知諸衆生皆是如來子世尊大慈悲、爲衆生修苦行、如人著鬼魅狂亂所爲多とある自分は斯く信ぜざるを得なくなつた、而して自分で信じて居る、斷じて信じたるが故に、喜びが出来たのではなく、信じても信じなくとも、佛は常に私を憐んで下さる、その御念力が私のよくな奴にも届いたのである、一体自分は意志が弱い、而かも神性質である故に、一旦信じても忽ち色々の事を考へ初めて、そゝして先きの信がどこへか去る、處が意志が弱かるゝが強かるゝが無限の大慈悲に對しては何等の痛痒も感ぜないのである、自分は是迄信仰と云ふものは意志の強い人でなければ載かれぬものと信じて居つた、そこで少しく有難味を感じても、意志が弱いから又去るであらうと豫期して居つた、現に此迄は必ず喜びが去つて仕舞ひ偶々法話又は聖教に遇つて非常の愉快を感じても少しも、心安くない忽ち去るであらうと思ふたか、處がそれでも佛は御見免し玉はぬのである。無限の慈悲であるもの、どゝしてそんな意志が強いからの弱いからのと云ふことがあらうか却て自分のような意志の弱い奴を憐んで下さるのである、實に／＼嬉しい感謝に堪えない處ではなく何共立方が無いのである寧ろ、進退窮まつたのであ

る。

又是迄どれが眞の道かを發見認識した後に之れを信ぜねばならぬ等と心得て居つたのは自分の力の無いにも拘はらず高慢であつたのだ、生意氣であつたのだ、嘆異鈔に

たとひ自余の教法は優れたりとも自ら爲めには器量及ばざれば及び難し、我れも人も生死を離れんとこそ、諸佛の御本意に在しませば、御さまたげあるべからず候

とあれども余は人が自余の教法に迷ひて六道四生に沈めりとも自分が自力を捨て、急ぎ悟りを開きそうして神通方便を以て先づ有縁を度すべきである何れにしても私は動かされなくなりました、攝取せられたのである、實に感謝に堪へません、兎に角結局を考ふれば死と云ふ場合には決して他人と共にするのではない、自分獨りて死なねばならぬのである、其時は幾ら他人の事を想ふても駄目である、何事をもするとが出来ぬ只振り掛るは暗黒の魔界、私は此の事をツク／＼考へますると堪えらなくなるのです、獨り静かな晩に深更に於て孤燈の下黙想すると、實に形容の出来ぬ恐ろしさが起りて来る、世人此事を聽かれたら餘りに神經質であると嘲るであらう、而し自分は嘲けられても事實であるから仕方がない、若し自分が此儘で過ぎ去つたなら、どんな風であつたか想ひ出すだに慄然たらざるを得ない、然るに何の幸ぞや無限の慈悲は此の弱き此の神經質なる私を殊に憐み玉ふとは。此の殊に憐み玉ふの殊にが私の心に云ふとの出来ぬ感謝やら喜びやらを起すことが殊に深いのであります。

今や自分は悉く追ひ詰められて大悲に悉く攝取されて身動

きが出来なくなりました、厭でも應でも救はるゝのである實に／＼感謝に堪えない誠に忝いとてあります。

一体私は是迄餘り死と云ふ問題には想ひを走せなかつた、偏に君の爲め國の爲めにと云ふ理想であつた、たとひ君から幾何なる迫害を蒙つても、之に盲従するのが誠の自分の務めてあると、力んで居つた。故に私は偏へに忠孝を以て根本とし、死の恐怖等言ふことは口にしたく無い、勿論死することは苦しいが、それを顧みないでやるのが、之れ男兒の本分である、自分は今でも想つて居る、故に日露の戦端開けた際にも自分は好機逸すべからず男兒死すべきの時來れりと大に勇んだ自分の友等が出征すると羨ましい、願はくは戦争がいつまでも續いて呉れるとよいと非常に祈つて居つた。心の中では而し死の苦痛は想ひ出さるゝけれども、そんなとにくよくよするのは日東男兒のなすべきとては無い歐州邊りの毛唐等がやるとてある、我が大日本帝國の男兒は宜しく義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも軽くすべしである、今の宗教家がやれ神の佛のとそれを本尊にするのが癩に觸はつてならぬ、況んや天皇を無視する社會黨の如きは蛇蝎のそれよりも嫌ひである、我大日本帝國は忠を以て根本とす、忠の前には孝も棄てねばならぬ、之れ我帝國の特色である故に、自分は議會等を設けて憲法を定めたのが非常に氣に喰はなかつた、我々臣民は絶体に天皇に服従せねばならぬ、それに議會を設けたのはどうも天皇の御恩の高大に依ると自分は偏に天皇の寛大なる御心を嘆仰したのである、この心であるから宗教家の本尊と自分が無上に嘆仰しつゝあつた天皇とがド／＼も衝突を來

す、若し自分が無宗教の家庭に育つたならば、或は宗教を棄て去つて仕舞つたかも知れぬ、處が私の家は眞宗の信者であるその感化が少くない、矢張り佛もあらせたい、天皇もあらせたい、何れも棄てられないのであつた、勿論眞宗では王法を以て本とせられ候とあるから差支は無いようなものゝ而し自分では生きて居る内ばかりでなく、死後も君の爲めて理想がある、彼の楠公が討死の際弟正季と七生報國を期し、笑つて死に就いた、その如くて自分では靖國神社に祭らるゝこと等は嬉しくない、そして自分では所得の爲めに盡すのは潔くない、そは遂に無功德であると信じて居るから、たとひ靈となつて、永く／＼君の爲め國の爲めに盡したいの念一つであつた(勿論行爲に於ては悉く翻語して居るけれども兎に角理想である)であるから未來の淨土に佛となるべく善事を行ふと云ふのが少しも氣に入らぬ、助かるべく念佛を申すのが一向有り難くないのであつた、然るに今となつてはどうであるか、あゝ如來は佛となるべく念佛せよとは云はぬ助かるべく善を行へとも云はぬ唯々無限の慈悲を垂れらるゝのではないか、そして吾れが如き無力のものを救はんと云ふ大願を起されたのではないか、只どこまでも限りなき慈悲である、故に吾れが如きものでも未來七生報國せんと想はゞ自分でするような小さなことでもなく佛に救けられ參らせて神通方便を以てどんなことでも出来るべくなるのである、それを如來は私に知らしめて下されたのである、少しも天皇の神聖に邪魔にはならぬ、否益々天皇の爲めに盡してよいのである、佛は天皇を見ず吾れを見よとは仰せられず、却て御勸め下さるのである、

自分の無力に更に力を與へて下さるのである。あゝ、私は實に感極まつたのであります。南無阿彌陀佛。

尚私が人から聞いたのでは駄目であると言ふ偏屈な理由を究めてゐる根拠とした爲めに思はぬ煩悶が色々の方面に起つたことの前に書き落した點の一つ二つを述べて見ませう。今から想ふと誠に面白いこととあります。

前に申しました通り、人から聞いたのでは駄目であると定めたものであつたら、少しも自分以外から見たり聞いたりすることが價值が無い爲めに、心では何の反感もない、あつても怒らぬ人から否自分以外からの刺戟であつて、それに従ふは迷つてゐるそれに従ふは上根の人のすべきものでない、もう自分より偉いものはないのであるとするから、打消される、自分が前にも述べた如く、自分に都合の悪いことならば夫れて大に善かつた、どんな高尚な名論でも何とも想はぬ、けれども自分に都合のよい理論や、救済の福音等に接した場合には、矢張りその通りであつたから少しも入らぬ、世の中から新智識を得ることが少しも出来なかつた、爲めに徒に内觀ばかりして居つた、それも盡きてだん／＼自分の過去の罪を想ふと、自分が是迄見たり聞いたりしたこと迄が、悉く無教に歸したのみならず、自分が是迄生活して居つたことも怪しくなつた、自分は全く自己以外の空氣とか、水とか、米とか云ふもの、爲めに養はれたのである。それでは自分が生きて来たのも、外界からの爲めてあるから、少しも價值がないと究めた處、化學上の所謂六十有餘の元素から、自分は成立したのであると究められた、佛敎で云へば地水火風の四元素から成り立つたのであると分つた。

しかし、此のような六十有餘の元素や四元素等が果して有るか無いか分らず、唯、化學上の實驗とか或は佛敎でならば佛敎そのものから敎へられたので矢張り自分以外から敎へられたのである駄目である、そこで又々考へ究めた結果遂に我れは元空であつたと悟つたのである、且つ想ふよう、幼時聞いたことがある何か禪宗の本で、もあつたか覺えては居らぬが、

斯くの如き場合には決して善いようには心はならない、光明などは少しもない、たゞ怖ろしいと云ふ感じ一つ許りである、色々の悪鬼が攻めかゝるような氣にしかねぬものである、自分が是迄見聞した内の光明のある方面には少しも想ひ到らぬ、到つても忽ち打消す、そして消しても消されぬのは恐ろしさ許りである、今や殆んど云ふことの出来ない恐怖やら煩悶からが一時に顯はれた

それが一日二日ではなく一月も續いた、夜等はずも堪まらない眠つて忘れよと勉めた、一向駄目であつた、圖書館に行きて遊んでみた成るべく人が余計に居る處がよい、演劇でも見よとしたが、その歸る途が恐はいたので、夫れも止めた、自分は寺に居るから歸り途が松や杉やの高い樹で暗く見えて、そこらかに悪魔が現はれては大變であるとの心配からである。

到底形容し難い苦悶に攻められた、若し夫れが尙續いてあつたならば或は氣が狂つたかも知れぬかも知れぬ、當時の煩悶が現象を示すことが出来るならば見るに忍びなかつた、實に慘憺たる苦痛に悩まされた、そこで友の處に等許り行くとして話して此の苦を忘れよとした、それでも此の位苦んで居り乍ら、友に此苦痛を明したくない自分が余が弱いと云はれるだろと、掛念して瘦せ我慢も程があつた、處て友と話をなすつと友が社會と云ふ、社會に居る限りは等と云ふ、それが自分に釘でも打たれるやうに當る、そんなことが續いて二月の十五日前後はじめて御慈悲をわかつていただいたのである。

之れも無限の慈悲が私のような淺慕な奴を御憐し被下た御念力が届いたのである、今や私が自分の理想たるの自由を得たのである。南無阿彌陀佛。

一切空と悟るのであるとやら、如何にも自分が空であるもの自分以外のものがあるか無いか分らぬ、唯茫漠たる空に違ひはないと知つた、偶然にも誰かの悟りと同じであるとは辨知されたから愈之れが眞理であると、非常に嬉しく感じた、嗚呼吾れは悟れり、釋迦何人ぞ、我れ何人ぞ位の大言壯語は幾らでも出来る愉快でならなかつた。自分以外のものは何でもない、びくともせぬ、然るに悲しいことには自分は其外に更に考へた、自分がびくともせぬの悟れりのと想ふのは何であるか、それは兎に角自分が死の恐怖と云のは何であるか、之が自分で一番恐ろしい、何より恐ろしいことである、一切空であるならば、何故に自分が今現存して我悟れりと思つて居るだらう現存は兎に角恐ろしいと思ふのが第一困る、あゝ是れを迷てあろうか、然り迷てある、是れは迷てあるから去らしめねばならぬと考へた、而し去らねばならぬとして強ひて去らしむるは、自暴と等しい、誦し自暴でないとしても、その迷であるの去らしめねばならぬのと思ふのが怪しい、一切空である處の我れがなぜこんなことを想ひ、意識するであらう、且つ此の迷てあると云ふのも自分で云つたのではなくいつか過去に於て自己以外から敎へられたのである、それが今茲に顯はれた迄の事である、尙且つ先きに自分が一切空であると悟つたのも、矢張り多年の間知らず識らずに養成せられたのであると思ふと一切空であると悟つたのも何にもならぬ、少しも分らぬ、而かも死と云ふ運命は刻一刻に襲ひかゝる、今にも死ぬか分らぬと想ふと堪まらなくなつた、深い／＼奈落底にても陥るような氣がする、

講

義

### 歎異鈔

#### 序 說

近角 常觀

歎異鈔の著者

歎異鈔は何人の筆になつたかと云ふ問題は最も味の深き研究である、夫は何故かと云ふに當時既に一方には煩惱具足の身なれば三業とも心のまゝによろしといふ邪見起り、一方には道場に二十一箇條の張文をして律法主義の計らひを主張した人のあつた次第ゆへに、其間に於て親鸞聖人の信仰の眞髓を書きたまひし方は何人であるかと云ふことは吾人聖人の信仰に渴仰し、特に歎異鈔によりて最も明らかに他力救済の味を頂きつゝあるものにとりては頗る肝要な問題である、吾人は特に前記二十一箇條張文の内容につきて一層精密に研究して其律法主義の計らひに對して力強く他力絕對の救済を説かれし著者の精神を發揮することは實に歴史的の問題であるばかりでなく、千古繰り返へざる、信仰上の問題として其眞意を味はねばならぬ。

彼二十一箇條の張文日記を各條につきて研究するに全体の

調子が如何にも嚴峻な筆法であつて、歎異鈔、口傳鈔、改邪鈔等の筆法と比較すると大に趣が異つてある、其點につき注

一 縦雖寫賜聖教并師判於背師說之輩者有衆從之義

如何にも嚴峻なる口調であつて、後人が聖人を尊むの餘り、師に背くの輩を戒むるためなるべけれど、親鸞聖人の眞意を去ること甚しきものである、聖人が如來の御はからひを信じたまひて、特に本尊聖教を私の物の如く取返すといふことは固く禁じたまひたのである、口傳鈔上六章に曰く

一 弟子同行をあらそひ本尊聖教をうばひとること、しかるべからざるよしの事、

常陸國新堤の信樂坊聖人親鸞の御前にて法文の義理ゆへにおほせをもちぬまふさざるによりて、突鼻にあづかりて本國に下向のさざみ、御弟子蓮位房まふされていはく、信樂房の御門弟の儀をはなれて下國のうへは、さつげわたさるゝところの本尊聖教をめしかへさるべくやさふらふらんとなかんづくに釋親鸞と外題のしたにあそばされたる聖教おほし、御門下をはなれたてまつるうへは、さだめて仰崇の儀なからん歎と云々。聖人のおほせにいはく、本尊聖教をとりかへすことはなはだしかるべからざることなり、そのゆへは親鸞は弟子一人もたず、なにごとををしへて弟子といふべきや、みな如來の御弟子なれば、みなともに同行なり、念佛往生の信心を得ることは釋迦彌陀二尊の御方便として發起すとみえられたれば、また親鸞がさづけた

とあるを口傳鈔下終より二章目には眞正面より正反對に其誤謬を指摘して、正されてある曰く(前同之を同意味の方に致へたるは誤)

一 つみは五逆謗法むまるとしりてしかも小罪もつくるべからずといふ事

あなじき聖人のおほせとて先師信上人のおほせにいはく、世のひとつねにもへらく、小罪なりともつみをおそれおもひて、とめばやとおもはゞ、こゝろにまかせてとめられ、善根は修し行せんとおもはゞ、たくはへられて、これをもて大益をも得、出離の方法ともなりぬべしと、この條眞宗の肝要にそむき、先哲の口授に違せり、まづ逆罪等をつくること、また諸宗のをきて佛法の本意にあらず、しかれども悪業の凡夫、過去の業因にひかれて、これらの重罪をかす、これととめがたく伏しがたし、また小罪なりともをかすべからずといへば、凡夫こゝろにまかせてつみをはとめえつべしとさきこゆ、しかれども、もとより罪體の凡夫、大小を論ぜず三業みなつみにあらずといふことなし。しかるに小罪をおかすべからずといへば、あやまつてあかさは往生すべからざるなりと落居するか。この條もとも思はずべし、これも抑止門のこゝろ歎、抑止は釋尊の方便なり、眞宗の落居は彌陀の本願にさはまる、しかれば小罪も大罪も、つみの沙汰をしたくばとめてこそその詮はあれ、とめえつへくもなき凡慮をもちながら、かくのごとくいへば彌陀の本願に歸託する機いかたあらん、謗法罪はまた佛法を信するこゝろのなきよりあこるものなれば、もとよりそのうつはものにあらず、もし改悔せばむ

るにあらず、當世たがひに違逆のとき、本尊聖教をとりかへしつくるこゝろの房號をとりかへし、信心をとりかへすなどいふこと國中に繁昌と云ふかへす、しかるべからず、本尊聖教は衆生利益の方便なれば親鸞がむつびをすて、他の門室にいるといふともわたくしに自専すべからず、如來の聖教は總して流通物なればなり、しかるに親鸞が名字のりたるを法師にければ袈裟さへの風情にていとひおもふによりて、たとひかの聖教を山野にすつといふとも、そのところの有情群類かの聖教にすくはれて、ことごとくその益をうべし、しからば衆生利益の本懐そのとき満足すべし、凡夫の執するこゝろの財寶のごとくにとりかへすといふ義あるべからざるなり、よくこゝろをうべしとおほせありき。

改邪抄六章に曰く

一 談義かたるとなづけて同行知識に鉾楯のときあがむるところの本尊聖教をうばひとりたてまつるいはれなき事

此意義は上の口傳鈔と同様である、如何にも聖人が寛宏なる度量圓滿なる人格があらはれてある、これは世俗の寛大などいふ意味でなくて、本尊聖教は佛物流通物にして我物にあらずといふ信念から來てあるのである、しかるに二十一個條の筆者は其意味を了解せずして正反對に聖教を悔る還さるべしと主張してある、猶最も著しき正反對は張文の第七條である、

一 於念佛門一生三十惡五逆信知而不可犯ナキ小罪

まるべきものなり、しかれば謗法闡提廻心皆往と釋せらるゝこのゆへなり、

之を以てみれば口傳鈔には二十一個條の張文の主義即ち律法主義のほからひを眞正面に正したまふことが明らかである、而して口傳抄も改邪抄も覺如上人が如信聖人より面授口決したまひたところを筆にしたまひしことは兩書の奥書に記されてある而して此口傳鈔は歎異鈔と全然一致してある即ち口傳鈔下終より第三章目

一如來の本願はもと凡夫のためにして聖人のためにあらざる事

本願寺の聖人先德より御相承とて如信上人おほせられていはく、世のひとつねにもへらく悪人なをもて往生す、いはんや善人をやと、このこととをくは彌陀の本願にそむき、ちかくば釋尊出世の金言に違せり(乃至)惡凡夫を本として善凡夫をかたはらにかねたり、かるがゆへに傍機たる善凡夫なを往生せば、もはらは正機たる惡凡夫いかたか往生せざらん、然かれれば善人なをもて往生す、いかにいはんや惡人をやといふべしとおほせことありき。

とあるは歎異鈔第三章惡人正機の章と全く同意義で言語まで同様である又口傳鈔上第四章

一 善惡二業事

上人親鸞おほせにのたまはく、某はまたく善もほしからず、また惡もをそれなし、善のほしからざるゆへは彌陀の本願を信受するにまされる善なきがゆへに、惡のをそれなきといふは彌陀の本願をさまたぐる惡なきがゆへに、(乃

至)たゞ善惡のふたつをば過去の因にまかせ、往生の利益をば如來の他力にまかせてかつて機の上しあしきに目をかけて往生の得否をさだむべからずとなり、これによりてあるときのれほせにのたまはく、「なんぢ念佛するよりなほ往生にたやすきみちあり、これをさづくべしと、ひとを千人殺害したればやすく往生すべし」のこのおしへに、「たかへいかんと、ときにある一人まふしていはく某におきては千人まではおもひよらず一人たりとも殺害すべきこと、ちせず云云、(乃至)善惡のふたつ宿因のはからひとして現果を感ずるところなり、しかればまたく往生においては善もたすけとならず、惡もさはりとならずといふこれをもて唯知すべし」

とあるは歎異鈔に於て罪惡救濟の極を説きたまひし第一章及第十三章と言葉も同じく又唯圓房に對する御教化の事實まで同様の事柄である、又かの最も有名なる歎異鈔の第二章の「たとひ法然聖人にすかされまゐらせて念佛して地獄に落ちたりともさらに後悔すべからず候」は執持抄第二章の「故聖人源空聖人の御ことなりのれほせに源空があらんとところにゆかんとおもはるべし」とたしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも故聖人のわたらたせまふところへまゐるべしとれもふなり」と全然同様である、そして執持抄は亦覺如上人の筆である。已上の諸文を相對照するときは歎異鈔は二十一箇條張文日記に正反對に立ちて絕對救濟の眞髓を示したまふことは口傳鈔改邪鈔執持鈔と同じ系統に屬することは確かにして一點疑を容れざる事實であるるこて古來歎異鈔を如信上人の作と

右此抄者祖師本願寺聖人親鸞而授口決于先師大綱如信法師之正旨報土得生之最要也。余壯年之往日悉從受三代本願寺大綱傳持之血脈以隆鎮所善二尊與說之目足也也とある、故に口傳鈔、改邪鈔は筆だけは覺如上人であるが、内容は如信上人の直話と言ふてもよい、其上に上に引用せる如く口傳鈔に歎異鈔と同一たる「善人なをもて往生をとぐ、いはんや、惡人をや」の文句をあげるとき、若くは二十一箇條に正反對のことを示したまふとき、「本願寺の聖人先德より御相承として如信上人もほせられていはく」とか「おなじき聖人のおほせとして先師如信上人のおほせにいはく」とあるを以てみれば、古來傳ふる如くすく、此歎異鈔は如信上人の作たることは疑を容るべき餘地を見出さぬと斷言することが出来る。

然し茲に一つ面白きことは歎異鈔中に親鸞聖人の對話として個人の名のあらはれたるは唯圓坊一人であつて、しかも二度までも出てある。第九章に  
念佛まうしさふらへども、踴躍歡喜のころをろそかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいりたきころのさふらはぬはいかにとさふらふやらんと、まうしいれてさうらひしかば親鸞もこの不審ありつるに唯圓坊おなじころにてありけり云  
又第十三章の善惡二業の事につきて  
またあるとき唯圓坊はわがいふことをば信ずるかとおほせのさふらひしあひだ、さんさふらふと申しさふらひしかば我云はんことたがふまじきとかさねて仰のさふらさふら

稱し、又覺如上人の作と傳へるは尤の事である、されど覺如上人は宗祖の滅後に後れたまひしこと八年なれば面授口決したまふことは出來ぬ筈である、しかるに歎異鈔の序説に「故親鸞聖人御物語之趣所留耳底聊註之」と云ひ又結文には「露命わづかに枯草の身にかゝりさふらふほどにこそ、あひともなはしめたまふひとく、御不審をもうけたまはり、聖人のおほせのさふらひしおもむきをも、まうしきかせまいらせさふらへども、閉眼ののちは、さころ、しどけなきことどもにてさふらはんずらめとなげき存じさふらひて云云」といひ、「故親鸞聖人のおほせごとさふらひしおもむきを、百分か一かたはしばかりをもおもひいでまいらせてかきつけさふらふなり」といひ、たしかに聖人に待りて直々に教化を受けたまひし人の筆たることは明らかである、故に覺如上人の筆であり得られぬこととなる、加之歎異鈔の文章は非常に力強き、簡潔にして信念の溢れたる類稀なる筆にしてたしかに覺如上人の文章とは異つた所がある、かく覺如上人の筆ではなくて又内容は口傳鈔改邪鈔と言葉までが同様であることは上に舉げられた如くである、そして口傳鈔には劈頭に「本願寺親鸞聖人如信上人に對しましめて、ありくの御物語の條々」と書き初め其與書には  
元弘第一之曆辛未仲冬下旬之候、相當祖師聖人本願寺親鸞報恩謝德之七日七夜勤行中談話先師上人信如面授口決之專心專修別發願之次所奉傳持之、祖師聖人之御已證所奉相承之他力眞宗肝要、以予口筆令記之云云  
と云ひ、改邪鈔與書には

いしあひだ、謹んで領狀まうし、さふらひしかばたとへはひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべしと仰せさふらひしとき、仰せにてはさふらへども一人もこの身の器量にてころしつべしともおほえすさふらふと申しさふらひしかば、さてはいかに親鸞がいふことをたがふまじきといふぞ、これにて知るべし云  
とある、前者は「まうしいれてさうらひしかば」と自分が問ふた様になつてある、後者も「さんさふらふと申しさふらひしかば」と自分が書いた様になつてある、こは文章の筆勢を見るに、いかにも唯圓坊に對して聖人が呼びかけて面授口決せられたる様子を唯圓坊自から追憶して書きた趣がある、若し然りとすれば歎異鈔は唯圓坊の筆とみねばならぬ、然るに後者を一本には「さんさふらふと申され」領狀まうされ「おほえすさふらふと申され」と第三者が書きた様になつてある是は唯圓坊の作を夫を他人が書寫するときに第三者か書きた様に書きなした本も出來たのかもしれない、されど聖人が唯圓坊と直々對話の様子を如信上人側から面り御覽じて書かれたとも考へられぬこともない、全体此唯圓坊は祖師の御弟子中でも著しき人、特に善惡二業の事は餘程有名な話であつたと見える、覺如上人も唯圓坊上京の時其直話をさかれたことが慕歸繪詞三の終に出てある曰く、  
延慶元年冬の比、常陸國阿和田唯圓坊と號せし法侶上洛しけるとき對面して、日來不審の法文において善惡二業を決し、今度あまたの問題をあげて自他數遍の談におよびけりかの唯圓大德は鸞聖人の面授なり、鴻才辨說の名譽あ

りしかば、これに對しても、ますます當流の氣味を添ける  
とぞ

何にしても唯圓坊は久しく聖人に面授して、特に罪惡救濟の  
ことにつきては深く頂きて居られた人たることは確かである  
之を要するに唯圓坊、如信上人覺如上人、何れも祖師滅後の律  
法主義の計らひを正さんために力を盡されたる點は同一系統  
である、故に唯圓坊とするも如信上人とするも格別の相違も  
鈔改邪鈔の與書の筆勢から想像するに歎異鈔の端書にない而  
して口傳

竊廻<sup>ニ</sup>愚案<sup>ニ</sup>粗勘<sup>ニ</sup>古今<sup>ニ</sup>嘆<sup>ニ</sup>異<sup>ニ</sup>先師<sup>ニ</sup>口傳<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>眞信<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>後學  
相續<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>疑惑<sup>ニ</sup>幸<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>依<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>緣<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>知識<sup>ニ</sup>爭<sup>ニ</sup>得<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>易<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>門<sup>ニ</sup>哉  
全<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>覺悟<sup>ニ</sup>莫<sup>ニ</sup>亂<sup>ニ</sup>他<sup>ニ</sup>力<sup>ニ</sup>宗<sup>ニ</sup>旨<sup>ニ</sup>

とある如何にも嚴かなる文句は如信上人の筆とみる方が穩當  
であろう、何となれば既に覺如上人か如信上人の事を先師と  
呼はれたるが如く又如信上人は親鸞聖人のことを先師と呼は  
れたのであろう、又與書によりて如信上人が親鸞聖人より面  
授口決されたことも明らかに分かる、加之其口傳鈔の内容と  
歎異鈔と符合することが如何にも多い、故に古傳の如く如信  
聖人の作であらう。こゝに吾人が深く感ずべきことは如信上  
人の父君は善鸞大徳である、そして親鸞聖人は善鸞大徳が眞  
實如來の御慈悲を頂かずして自力を離へられた、其事は慕歸  
繪詞第四の第一段最須敬繪詞五の第十七に出てある、夫がた  
めに近づけさせられなんとこの事である、是が親鸞聖人か血統  
よりも信仰の方を重んぜられたからである、夫程にせられた  
から又其善鸞上人の子の如信上人が常に祖父親鸞聖人を仰ぎ

て有縁の知識と喜び、最も力強き絶對他方の眞髓を繼承した  
まひたるは如何に美はしく辱きことである、如信上人は稻田  
の草庵後の田より收獲したる庵田米を負ふて箱根の嶮を越へ  
御正忌に上洛せられたといふ言ひ傳がある程にやさしさ人格  
であつたとの事であるが、たしかに此歎異鈔は其濃かな情か  
溢れて文字となつたものである即ち「まことにわれもひとも、  
そらことをのみまうしあひさふらふなかにひとつ、いたはし  
きことのさふらふなり、そのゆへは念佛まうすについて、信  
心のちもむきをもたかひに問答し、ひとにいひさかすると  
き、ひとのくちをふさぎ、相論のた、かひかたんがために、  
またくればせにてなきことを、ねほせとのみまうすことあ  
さましくなげき存じさふらふなり」とある、如何にも切實な  
文字である、これ端書に「全く自見の覺悟を以て他方の宗旨  
を亂ること莫れ」とある點である、即ち十章已後に一々擧げ  
たる異議様々あれど、要するところ、他力の御計を自分の計  
ひを以て亂るからである、依て其自分の計ひをやめて同一信  
心の行者となれがしと筆をとられたのである、故に結文に  
「さいはいに念佛しながら直に報土にむまれずして邊地にや  
どをとらんこと、一室の行者のなかに信心ことなることな  
らんために、なくく筆をそめてこれをするす、なづけて歎  
異鈔といふべし」とある、吾人は是より各章につきて味はん  
と思ふ。

(序説終)

嘆  
咏

蓄  
の  
玉

左 千 夫

歌のまどひありけるに、聲といふ題出  
づ、予は吾末なる幼女の上を歌みぬ、世  
の中に幼きものをいつくしむ許り樂  
しく聲とくおぼゆるはなし。

物語りつくる思ひに凝るこゝろ幼兒かれが聲にゆ  
らげり

老ぬれば然かするものか幼兒が片言いふに心むな  
しも

未なるがめぐしきものと群肝の心にしみぬしが幼  
な聲

朝宵にはぐゝむ稚兒にしが聲を聞けばゆらぐは吾  
老ぬらし

隔たりに稚兒か叫ぶに人に逢ひて言繼きがつ耳  
空しけは

母が手を離れ相呼ぶ幼なとち梅のつぼみのふゝむ  
宵かも

幼兒の心とほれる片語に兎の毛の末の塵も覺え  
ず

或る夜齒の痛みはげしくて眠らぬまゝに作る歌  
八 風

幾年を旅には慣れつ然かはあれど吾が齒やめれば母珠に  
思ふ

齒を痛み見なれし齒のおのづから目には見つゝも忍し  
えず

眠るにはあらで眼のおのづからとちらえてゆく痛み苦し  
も

灯ともせどももの見らぬ床の中に歌を思はば痛みやま  
んか  
小夜更けてれらぬまゝに吾が命長かるまじと今更に思  
ふ

空

行 泉

谷風そよぎ笹葉鳴る  
 静かの山に長しへの  
 よろこび満てり。音立たぬ  
 淵の流れに岩搖する  
 力こもれり。吾思ひ  
 吾身に問ひ、吾問ひて  
 吾身答へ、頼むなし  
 人をも吾をも、たゞみ佛  
 心にしぬぶ。むなしき  
 み空に星は輝けり。  
 人の力の滅びなば  
 幸こゝに雲と湧かむ。



水の響

八 風

谷底に落つる木立の影の間を見えつかくれつ我  
 が影歩む  
 路の邊にむら消えのこる白雪を口にふくみつゝ  
 峠まで來ぬ  
 和田峠登りつむれば向山の岩山の間に煙立つ見  
 ゆ  
 山かげをめぐり出づれば山の間ゆ遠見えそむる  
 駒ヶ嶽かも  
 山かげにめぐりて入れば見えざりし深雪つもれ  
 る岨連れり  
 荒川の瀬をせく岩間落ちたぎつ水のしぶきに虹  
 の色見ゆ  
 大岩の千岩群れ立つ山のかひ山をどよもし流る  
 荒川  
 山の間の空をより立つ群山の山巒の雪日に輝け  
 り  
 岩の間を落ちたぎち水岸の岩に迫り流るも千波  
 しくく

甲 之

千世をへて磨かえ伏せる河床はさやる隈なく水  
 さ走れり  
 向がしの岩ふところに抱かえし若子小岩を守る  
 かさゝ波  
 河中の岩秀に立てば岩めぐる水のどよみを見過  
 しかねつ  
 岩の間をめぐり流るゝ水底を水泡のかげはゆれ  
 て走れり  
 千重たゝむ岩いたゝきの松が枝は空を遙けみつ  
 ばらに見えず  
 空ふたく岩秀めくれば瀧の音鳴りどよもして谷  
 開けたり  
 久方の天の幸湧く眞名井戸のあふれの水の落ち  
 たきつ瀧  
 落ちたきつ瀧のどよみに水きはべのさゝれによ  
 する千重のしき波  
 瀧つぼの底の細石にさやりつゝゆく水の上の波  
 のゆらく  
 久方の天の岩秀をこもり落つ瀧つ白玉光りとほ  
 れり

時報

展墓行

回顧すればはや三年の昔とはなりぬ、吾父危篤なりとの電  
 報を受けて倉皇として東京を出立せしは。月日も同じ三月九  
 日。こたびは亡兒の遺骨を伴ひて、先考の墓側に埋み、三年  
 忌を營まんとて出立す。晚十時出發。品川に到れる頃一天青  
 ずみて星光輝き、海上碧にして萬里一目の裡にあり。寒氣悽  
 絶にして車窓に迫る。覺えず眠に落つ。静岡に至りて初めて  
 驛名の叫びに醒む。  
 夢寐の間に遠江を過ぎて三河の平原に夜は明けたり、人多  
 くして少しも動くあたはず、尾濃の野を眺め盡して、伊吹山  
 の雪を望むに至り餘寒料峭として春風猶未だ江州に到らざる  
 を覺ふ、米原に乘換へ虎姫に至る頃は春日麗かに石も融せん  
 ばかりなり、下車せば驛夫親切に荷物運び、停車場前の垂  
 楊柳眼眠たげ也。  
 田舎道二里、車を走らせて薄暮我村に着す、先づ先考の墓  
 を展して、母君に見え奉る、温容嬰鑠として兒心頗る安し、  
 直ちに佛前に詣す、門徒の者二三、花を挿みて佛事の準備に  
 忙し。  
 十一及十二日は先考三年忌の當日也、嗚呼一昨年の昨今は  
 父上の病床に侍して、唯々として遺訓を受けたること猶昨日

の如し、而して共に遺骸の下に哭したりし従弟東溪君、今や既に骨を北韓の邊境に埋め、我が嬰兒夭折亦父上の後を追ふ、俯仰低徊無常迅速の感に堪ふべけんや、乃ち恭しく香華莊嚴を具へ、衆僧を供養して、法要を營む、夜兒の爲めに讀經す往相還相の和讃を誦するに及び靈感胸に充つ、又日中後從弟の爲に讀經す、將に始めむとするに及びて突然戰友葛有賢氏の來訪ありて之に加はられしは洵に奇遇と謂つべし。

十三日地方戰死者追悼會の爲めに演説し、爾來十六日に至るまで毎日毎夜寺に於て又門徒に就て讀經傳道に務め、未明より夜深に至るまで寸暇なし、是父が六十年來勤めたまひし道にして、又平常外に遊ぶもの、偶々郷に歸りて、佛祖に事へ有縁の同行に酬ゆる所以の道也、其間長濱青年會の杉本、川村の兩氏遠く田舎道を辿りて法を求めたまひしは最も嬉しかりき又一夜門徒の者危篤に迫れりとして夜半門を敲きて來り迎ふ、馳せて病床に就き、手を執りて大悲を傳ふ、病苦熾しが中に歡喜措かず、念佛暫くも止むことなし。

十六日古橋村葛有賢氏の寺にゆきて追悼會演説を爲す、氏は従弟東溪君の親友也、昨年七月氏亦出征して、朝鮮輸城に在り、東溪君行軍して來り過ぐる時、氏路に迎へ自ら製する所の小豆餅を贈る、時に洪雨劇甚し、兩人雨中に對話するこゝと三時間、手を握りて相誓ふて曰く、人生何ぞ苦しき此の如くなる、寧ろ先んずるもの幸福なり、我先んせば後事を君に一任せん、君若し先んずれば我君に代りて其後を處理せん、而して先んじたるものは先づ樂土に往きて他を待つとの榮を得む唯同一念佛の一道あるのみと、時に氏卒爾として嘆して曰

を注ぎ、法性常樂の靈境を懷ふ、合掌又手無阿彌陀佛、此夜感謝欄を認め、翌朝早朝佛を禮し、母上に辭して東歸の途に上る、離愁綿々曉風衣を吹きて森霜の氣身に迫る、

長濱佛教青年會

十八日同會開會、午前は信仰談話會を催ふし、午後議事堂に於て演説會を開きて實驗の信仰を説く三時間、夜亦村瀬氏宅に於て信仰談話會を開き夜半に至る、同會は眞摯なる、青年信者の集合にして或は社會主義に或は基督教に幾多思想上の經驗を過ぎ來りて遂に親鸞聖人の絕對他力の信仰に安住する人多し、洵に清新の團體と謂つべし、十九日は米原に出で旅窓滞在敷異鈔講義を草す、黄昏散步して湖畔に至る、水烟遠く、罩めて郷思新に湧く夜半稿成りて東行列車に乗る。

三河榎前村尙武會

二十日安城驛に下車して同會に赴く、一郷の追悼會也、午前後絶對他力の信仰を説く、由來眞宗盛大の地老幼敬虔にして法を聞く實に感ずべき也、京極徳舎氏は嘗て哲學館に遊びしの人、燭を剔て信仰を語る、舊情亦新たにして厚誼掬すべき也

静岡演説會

二十一日正午着、穴山風樹氏迎はる、恰も多田鼎君來られ亦迎はる、手を執りて相喜ぶ、大谷派別院に於て開會晝夜とも多田君とともに法を説く、同地漸く求道の新氣運起らんとす、殊に師範學校の熊田氏を始として職員生徒獲信の人多し夜演説後信仰談話會を開き、互に胸臆を披き、心田の開拓に勉む

く、我は政教時報第壹號以來の「求道」愛讀者也、惜むらくは出征以來之を見るを得ずと、東溪君曰く然る乎と聲に應じてボケットより「求道」第壹號と第五號とを出して曰く、是東京より書翰として贈り來る所、我毎朝散步して反覆玩索措かざる也、我割愛して讀んで君に献ぜん、我今樂むところのもの三あるのみ、一に我子の書を繰返し見ること、二に友人高月氏の書面を讀むこと、三に此求道を繙くことは也、葛氏友情に感激し相擁して南北に別る。未だ一月ならざるに東溪君の訃到る、氏慟哭して止まず、中夜歌として眠られず、夜半起きて陣中經を誦して曉に達す、此の如くすること三週日爲めに大に道念を養ひ得たりと云ふ、平和克復して凱旋するに及び心中私に誓て曰く、我先づ東溪君の寺に就き其靈前に奉告して後我家に到らむと瀛車京都を過ぐるの時一人の軍曹葛氏の傍に入り來る、氏質すに何れに往くかを以てす、彼曰く、我遺骨を江州に持參するもの也と乃ち其名を質す、彼曰く東溪軍曹の遺骨也、氏愕然として言ふ所を知らず、瀛車高月を過ぐるの時亦期せずして高月君偶然其列車に入り來る、相顧みて益々奇異の念に堪へざりしといふ、而して今や予幸に歸郷して氏が寺に法を説く、嗚呼是れ不可思議の佛縁によらずんば何ぞ能く此の如くならむや。

十七日再び我寺に歸る、薄暮先考の墓側に見妙好禪尼の遺骨を埋む、其中に聖徳太子の土塔及父母が骨を參詣して自ら齋らせたまひし法隆寺及磯長廟下の小石を埋む、嗚呼諸根悅豫の老祖父の側らかに安らかに眠る清淨無垢の孫妹は何ぞ幸なる、予が其跡を追ふ亦久しからむや、讀んで華を捧げ、水

沼津演説會

昨冬一たび同地を過ぎりてより因縁益々深し、沼津說教所を中心として中學校長職員及び有志諸氏の清新なる集會なり日曜學校と女子部講話とを開き夜信仰講話會を開く、二十日午前九時着、有志者相語り莊野氏宅に午飯の招を享け、同地出張赤十字社柳澤軍醫及中學の平木教授の近々同地を去らるゝを以て一同撮影し、同後講話を開く、前記諸氏を初めとして市中有志、女子、老人、兒童に到るまで一堂に會し、和氣團々として春風座に充つ、坐ろに慈光の遙かに被るを感じて歡喜堪ふべからず、深く信仰の實驗を傾けて、飽まで大悲の照護を語る、四時五十五分、一同諸氏が懇切なる友情に包まれて、プラットホームに相別る、夜十時半新橋に山路君の迎を受け求道學舎に歸着、家庭團樂諸君と相語りて夜半に到る、(旭村生識)



### 求道會館設立喜捨金

### 受領報告(第拾參回)

- 金拾六圓 東京 荻野
- 金壹圓 長門 松澤
- 金拾圓 尾張 梶井
- 金參圓 越後 柳澤
- 金壹圓 長濱 山崎
- 金壹圓 長濱 川村
- 金壹圓 長濱 杉本
- 金參圓 三河榎前村 尚武
- 金五拾錢 靜岡 村瀨
- 金參百八拾五圓 電話賣却繰込

小計金四百貳拾壹圓五拾錢也

通計千九百參拾參圓二拾八錢也

右御寄附を尋らし難有奉存候茲に謹んて奉感謝候也

### 東北饑饉義捐金(第二回)

金參拾圓七拾五錢

金貳圓

吳市和庄通り 村上佐一郎殿

右正に取扱ひ先方へ相渡候也

### 文學博士南條文雄師 解題

### 親鸞聖人御傳鈔

定價一部五錢 郵税三冊迄二錢 十部以上一割引

▲表紙石版色ずり、菊判裁紙數六十頁▼

四月親鸞聖人の御誕生會におきまし  
 一日親鸞聖人の道友に御願 御傳鈔  
 本致しましたのが、この御傳鈔に本年は特  
 南條師が丁寧なる解 實にわたり易く明  
 して下されたるものすから、唯一 實に殘念  
 部の方にばかり讀んでいたゞは、 實に殘念  
 して、本年は特に 實價で御頒 致し  
 一般の御同胞に 實價で御頒 致し  
 が綺麗か、な 總假名付で誰に 讀  
 様に、してあ 御自身が平常の御施本用  
 けりますから、御自身が平常の御施本用  
 轉法輪の大縁とは今更 申す迄もな  
 いことかと 信じます。

**發行所** 東京府北豊島郡 東鴨村真宗大學内  
 東京府北豊島郡 東鴨村真宗大學内  
**取次所** 東京府北豊島郡 東鴨村真宗大學内  
**無盡燈社**

### 求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しく、  
 皆格なる實行の必要を感じ、國民に眞摯なる氣風頗る乏しく、  
 るものは、確實なる信念を摺まむとして、青年學生にして眞面目な  
 るが爲に、社會の人生問題の解決に辛酸を嘗めざるは、其理想を實現せ  
 ざるは、未だ嘗て見ざる所也。此に於て、求道の志は、其理想を實現せ  
 仰るは、未だ嘗て見ざる所也。此に於て、求道の志は、其理想を實現せ  
 昨年の企てられし跡を引継ぎ、必要に應せむとする志あり、先  
 輩の道を行くに勉むるの跡を引継ぎ、必要に應せむとする志あり、先  
 等々の道を行くに勉むるの跡を引継ぎ、必要に應せむとする志あり、先  
 實踐の道を行くに勉むるの跡を引継ぎ、必要に應せむとする志あり、先  
 人々と共に心を潜めて、師友の講義を聞き、互に心霊の修養を  
 空しからず、幸に佛陀冥祐と、師友の講義を聞き、互に心霊の修養を  
 場を充てたる居間は、常に満員に充て、懇切なる道人の勸告に従ひ、  
 舎を擴張し、此に於て、佛陀冥祐と、師友の講義を聞き、互に心霊の修養を  
 實なる實行によりて漸次其結果を挙げむことは、實に不肖の至  
 願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感ず  
 事一日の事にあらざる。而して屢々計畫せられて、未だ容易に  
 實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全  
 を期すれば、漸次其大なるものに進むる必要に應ずべき適宜の會館  
 本會館の建設を企圖して佛敎の一般の需要に充て且つ清潔な  
 る社會の中心に於て佛敎の設備等と欲する所也。予西遊の際、泰西青年  
 會の組織及會館の設備等と欲する所也。予西遊の際、泰西青年  
 細調査し來りて、此等の事業の我國佛敎者の手に成らむ事を  
 望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得  
 は幸之に過るなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察  
 せられ、協力贊助し玉はらむことを講て白す。

明治三十六年十月 發起者 近角常觀

### 諸大家贊助並に執筆 (月三回)

### 家庭新聞

號四第

▲世評一斑 (一部五錢半年分金六十錢)

清新なる家庭の建設者として雑誌「清光」と「家庭」と合同し家庭新聞と命名して世  
 に生れぬ、家庭を本意として宗教と文藝との調和を圖り、廣く世に之を鼓吹する  
 を以て其主張となす、現今家庭雜誌頗る多しと雖も佛敎趣味を説くもの至て稀に  
 して世の風に慳分とする處なり。

然るに本誌の出るありて同信の士女を満足せしめ、佛陀慈光の下に温かき家庭を  
 建てしめ趣味ある生活に導かんとす、吾人實に其多大の同情を以て本誌の發達  
 を祈るもの也云々

- 女子の心得 前田博士
- 家屋と精神衛生 門脇博士
- 丙午と火災 大槻博士
- 料理の心得 村井博士
- 坐禪と修養 村上博士
- 七福神の話 芳賀博士

等如初め諸大家の有益多趣味の記事もて満たさる實に家庭新  
 聞の上乗也

**發行所** 東京本郷 四丁目五番地 **家庭新聞社**



●高橋五郎新著

▲最新刊

# 釋迦論

菊大判全一冊  
紙數凡四百頁  
定價金八拾錢  
郵稅十錢

佛教が所謂高等批評を蒙るべき時は來れり、佛敎を單に佛敎内にて研究するは未だ足らず、著者は其該博なる知識を以て比較宗敎的に之を精査せり而て基督敎が佛敎の子たるに非ず、佛敎却て猶太敎が印度哲學及婆羅門敎の母たり隨て又佛敎が基督敎の庶弟たるを發見せり且釋迦牟尼が純乎たる大異端家にして徹頭徹尾從來の哲學宗敎を剽襲し毫も自家の創見無かりし由を事實の上に證明せらる佛敎批評界に於る一革新を來せる者と謂はざる可らず、  
**何等の大膽、何等の奇抜!**

# 日蓮論

菊大判全一冊  
表裝高尚優美  
定價金六拾錢  
郵稅十錢

大日本の法華經と唱へて自ら國の柱石を以て任じ、權勢に抗し、迫害に對して勇往直前、妙法蓮華經を説き石を擲たれ瓦を投ぜられても平然として法を説きたる偉僧日蓮の偉彩人の眼を驚かす行動は誠に現時の惰眠に陥り爲すなきの宗敎界に覺醒を與ふる一大痛棒たらざるば非ず、殊にモルモン宗と日蓮宗とを比較評論し、布敎宣傳の道を論じ所謂豫言者を罵倒す痛快一讀に餘あるべし

近角常觀著

# 信仰之餘瀝

第七版

定價 上製 二十錢  
並製 十五錢 郵稅貳錢

發行所

東京市本郷區  
四丁目五番地

文明堂

賣捌所

東京市本郷區  
森川町一番地

求道發行所

近角常觀著

# 懺悔錄

再版

(附錄「歎異鈔」)

定價 貳拾錢 郵稅貳錢

發行所

東京市本郷區春木町  
二丁目二十一番地

森江分店

賣捌所

東京市本郷區  
森川町一番地

求道發行所

●高橋五郎先生著書目

世界三聖論

訂正五版  
定價四拾錢  
郵稅六錢

宇宙觀

訂正再版  
定價壹圓拾錢  
郵稅十五錢

人生觀

訂正十五版  
定價五拾錢  
郵稅八錢

人生哲學

訂正八版  
定價五拾錢  
郵稅八錢

最新一元哲學

訂正六版  
定價五拾錢  
郵稅八錢

戰爭哲學

訂正再版  
定價四拾錢  
郵稅六錢

フアウスト

訂正三版  
定價六拾錢  
郵稅十錢

英フアウスト

訂正再版  
定價四拾五錢  
郵稅六錢

明治卅九年  
改正内外圖書目錄

無代進呈

改正圖書目錄御入用の方は郵券二錢御送り被下候へば早速送附可仕候

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし
- 一、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

- 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢
- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十九年三月廿七日印刷  
明治三十九年四月一日發行

發行兼編輯人 百目木智穂

印刷人 白土幸力

發行所 東京市本郷區森川町一番地

大賣捌所 東京市神田區神保町

同 本郷四丁目 東京堂

同 文 明 堂

前號要目

求道

◎信仰の中心

◎信後の修養

◎自ら計ふ勿れ

感謝

◎如來廻向◎聖人の消息◎歎異鈔と末燈

◎無上の慰藉◎講話と告白◎常行大悲

◎報恩謝徳

講話

◎招喚の聲

聖傳

◎ジャータカ釋尊傳—幼時

近角 常觀

告白

◎不思議の佛縁

◎所感

研究

◎讀書漫録

講義

◎歎異鈔—序説

嘆咏

◎日知の盆

◎夕山

◎墓掃除

時報

◎羽村求道會の消息◎安中佛敎青年會涅槃會◎求道會講話題等

齋藤 たい  
宮澤政治郎

常盤 大定

近角 常觀

左 千 夫

甲 之

八 風